

の用愼に、内側の目隠を引き、窓掛を卸して少しも光明の洩れないやうにした。そして尙ほ念の爲めに各室を一順見廻つた。やがて鼠一匹も居ないことを確かめて、再び書齋に歸つて來た。女の歩く時に少しも衣褶の音がせないのは、不思議のやであるが大方態と絹衣や糊をした衣服を避けて居るからであらう。

女は氣分も落ち付き、度胸も据えて來たと見えて、机の上で索り當てた手ランプに火を點じ、一順室内を見渡した。さて愈よ之から仕事にかゝるのだと思ふと、俄かに搏脈の昂進と呼吸の急迫を覺え、目は怪しげに輝いた。そして机の上に両腕を突き、手の甲に腮を支えて暫く考へて居たが、時間に限りがあるのに仕事は仲々多いから、今は躊躇すべき場合でないと、勇氣を出して机の前に正しく腰を懸け、自分の持つて來た手提鞆を開き、其中から帆布綿の袋と、金の巻煙草入を出した。女は此日の午後相川から取り返した寶玉を窃と中野に返さうと思つて居るのである。が、併し夫れを何處へ置いて好いかと一寸迷ふて居るのである。直ぐに目に留まる處でなければなら

ぬが、若し佐助の目に觸れたら、如何に正直な男でも、不圖惡心を起さないにも限らないから、滅多な處へは置かれぬ、全体恁んな貴重なるものを金庫以外の所へ置くのは間違つて居る。非常に危険であるが、彼は之を持つて居ると、何だか強盜犯に連座して居るやうな氣もすかので、片時も早く元の所有主に返へしたいと思ふのである。だから、一時此危険を冒すのは止を得ないとして、明朝早く電話でも中野に注意すれば構はないと思つたのである。女は机を中心として、其邊を見廻したが、不圖伏せた真鍮の椀の上に、重い本を載せてあるが目止つたので、不思議に思つて之を取り除けて見たが、其下の寫字臺の上に手形があつた。女は一寸考へて居たが、直ぐに此謎を解いた。

『おや！』と細い低い聲で叫び『ほんとに私は不注意だわ』と云つた時には少し微笑して居た。

併しまだ不審が全くは晴れないのを見えて、猶且眉を擡めて考へて居たが、聽て自

分の手をかの手形に當てがつて見た。

「餘程不思議に思つたのよ、若し何であつたら屹度また開けて見るに違いないわ」と
獨語つた。

此「何であつたら」は何を意味して居るのか、餘り詮索すると却つて興を削るかも知れないから讀者の想像に任せて置く。女は廳で手形の上に袋と巻煙草入を置き、梳を伏せ、本を載せて元の通りにした。そしてポケットから鼠色の手袋を出して、本の上に置き、少し上半身を後に引いて見直し、其出來榮えに満足して嬉しそうに微笑んだ。

時は刻々と進んで行く、まだ一つ大仕事があるのであるが、女の勇氣は再び沮喪したと見えて、幾度も溜息をした。そして容易に決心がつかないので暫く椅子に掛つた儘もぢくして居た。併しどふして此仕事をせずには濟まされぬ事情がある。自分の一身を犠牲として之に當らなければならぬ、事の成否は或人の運命を決するのである

再び試みて失敗したから、三度目の今宵は是が非でも此目的を達せなければならぬ、と女は漸く決心して立ち上つたが、其拍子に何か足の爪先に當つてジャランと音がした。驚いて之を拾ひ上げて見ると、十個餘りの鍵を通した金の輪であつた。大方此處へ落してゐて忘れたものだらうが、之れあるが爲めに尠からず時間と勞力を省くことが出来るから、女に取つても最も貴重な捨物である。中野の鍵を以て中野のものを盗むものは一層罪が深いやうに思はれぬでもないが、既に罪惡を犯す爲めに忍び込んだのであるから、云はゞ五十歩百歩である。今更義理や人情を思つて躊躇するのは寧ろ愚である、勇氣を鼓して終に抽出しの一つに鍵を當てがつたが、譯もなく開くので次ぎから次へと開いて中野のものを悉く引つ繰り返して詮索した。

一番下の抽出しを開けて見ると、其處には漆塗りの文箱があつたので、それを出して膝の上に載せ、一番小さい鍵を當てて見たが、果して蓋は直ぐ開いた。そして女は中の書類を改めたが、其顔は見る／＼喜びに輝き、嬉しさの餘り覺えず小さい呼び聲を

出した。と、殆んど全時に階下でガタンと音がした、誰か這入て来た様子である。女は文箱を持つた儘遽て立ち上つたが、肝心の使命を忘れるまでには狼狽せなかつたと見えて、文箱を元の抽出しに入れ、直ぐ其手で手提靴を開けて、其中に何かねじ込んだ。もう一分間の猶豫もない、階下に男の話し聲がして居たが、それが次第に近く聞えて来る。一人が聲高く笑つたが、其笑聲がナイフで貫いたやうに女の胸に鋭く徹へた。階段を登る足音の一つ一つで女の運命は縮つて来るのである。

女は遽てランプを吹き消したが、全時に燃え残りの石油瓦斯がホヤから舞ひ上つて、塞つた室内の空氣の中に漂ふた。或は此瓦斯の臭氣が自分の身に禍なすものではないかと思つたが、今は何うすることも出来ない。若し逃げ迷ふて捕へられたら自分の身は何うなるのであらう。中野が歸つて来たのであれば其處に一縷の光明があるが若し全宿人の誰かであつたら萬事休するのである。

足音は止まつた、つまみをねじる音がする、女は恐怖に取り逆せて今は早や何の考へもない。唯隠れ得られるだけ隠れて、機會があつたら逃げるまでである。此本能的衝動の導くまゝに、女はスカートをからげて、窺つと寢室に忍び込み、其處から廊下に出で、食堂と臺所の前を通つて靴室へ来た、此室の窓は非常口に通じ、直ちに外へ降りて出られるやうになつて居る、女は前日忍び込んだ時に之を見て居るから、此室を隠れ場所にしようと思ふのである。戸は幸ひ開いて居たので、中に這入つて音せぬやうに窺つと扉を閉めた、窓を開けやうとしたが、平常閉め切つてあると見えて、掛金が錆びついて動き初めもしない。假令外し得るとしても屹度ガタンと音がするに違いない。と、云つて此所に此儘居たら袋の中へ這入たやうなものである。と、恐怖の叫びは喉にこみ上げて来る。二人の足音は此方へ近づいて来るやうである、戸の隙き間から早や光線が這入て来た。問ひつ答へつする二人の話し聲が明かに聞き取れる二人は終に次の間へ這入つた。

『旦那此處にも居りません』と之は確かに佐助の聲である。

『では、食堂だらう。夫れでなければ屹度靴室だ』と一人は云つた。

もう音のする事を心配しては居られないので、女は全力を罩めて掛金を押し上げたが、矢つ張ビクともせない。此努力と恐怖の爲めに動悸は激しく打ち頭はわく／＼して昏倒しそうになつて來たから、室の隅に身を避し、大きな靴の蔭に身を横へ、着て居る黒い半マントを以て顔を被ぶつた。

女の居を室の扉は開かれた、バツと室内は明るなつた。女は息を殺ろし、身を縮めて静かに横はつて居たが聽て、佐助の旦那と云ふ男が。

『不思議だねエ、此處にも居ない』と宣告したので、女はやれ／＼と安心した。此間僅かに十秒間であつたが、夫れが恰も十年の長きを経たやうに思はれた。

斯くて二人は戸を閉めて立ち去つたが、去りがけに。

『矢つ張旦那がお這入りになる前に逃げたものでござえませう』と云ふ佐助の聲が幽かに聞えた。

女は立ち上つて今一度窓を開けて見やうかと思つたが、身体は綿のやうになつて、立ち上るだけの力も残つて居ない。強い鐵のやうな意志で、今にも起らうとする昏倒を防ぎながら、目を閉ぢ、頭を壁に投げかけて座つて居たが、五分間計り經つと再び入口の方で聲がしたので、女は覺えず頭を擧げた。脊の高い色の白い男が手ランプを高く差し上げて敷居の上に立ち、六ヶしい顔をして自分の方を見て居るのであつた。

『佐助はもう居ないですから、どふぞ出て來て下さい』と其男はやさしく云つた。

十六 蛇に見入られた女

女はランプの光を眞に受けて居る男の顔をじつと眺め、拘孿を起した人のやうに、二三度足で壁を蹴つたが、まだ起き上らうとはせない。激しく身を震はせながら、右の手で靴の角を攫み、左の手で胸を押へて、動悸を鎮めやうとして居る。女の頭には今ま旋風のやうに、様々の考が渦巻いて居るが、今ま免るべからざる究地に陥つて居

ることだけは明かに意識した。

今は青野村の中野邸へ忍び入った時と、大分事情が變つて來て居る、中野は全く調子の變つた不思議な女に偶然出遭つて、その好奇心と冒険心は極度に刺撃せられ、自分の機智と膽力は、女に比して幾分劣つて居るにもせよ、少くとも其壘を摩すること出來る、と云ふことを女に信じられたいと思つた。女は上流の家庭に育ち高等の教育を受けながら、態と其群を離れて、人の蛇蝎視する強盜に化けて、一世を驚倒せしめやうとして居るのである。其辨才と云ひ機智と云ひ、堂々たる六尺大の男子をして顔色なからしむるものがある。女を此墮落に導いたものは果して何であるか、怎う考へても不可解である、謎の女であると思つたから、中野は暫く女と接觸を繼續せしむる爲めに、態と寛大宏量を示し、女に恩を賣つたのであらうが此好奇心が何時まで續くかは頗る疑問である。女が中野の心を支配して居ることは確かで、現に幾千萬弗の價值があるか解らぬ稀代の寶玉を一時女に任せた。併し男の心の變り易く、それは單

に一時の氣まぐれであつたかも知れぬ、既に今朝分れる時、中野の態度は誠意を缺ぎ幾分女を卑んで居る様にも見えた、寶玉を確かに自分の手に入れたから、早く女を振り棄て、一切關係を絶つに越したことはないと思つたのではあるまいか。既にユーゼーヌ、ホテルの晝餐にも中野は約束を破つて出て來なかつた、これも今朝分れる時の氣まぐれであつたのであらうと、怎う女は思つたが。自分が佐助に、電話をかけた時に、中野は一時に外出したと云つたから、ユーゼーヌ、ホテルへ來る暇は充分あつたのである。否や、中野には最初から晝餐は共にする氣はなかつたのである。或は自分の代りに探偵を差し向ける積りであつたかも知れないが、弱い女を苦しめるにも及ばないと、紳士の体面を思つて強いて追求せず、其儘に打ち遣つたのかも知れぬ、と女は疑つた。其處で中野に最初からホテルへ行く考が無く、一時に外出したとすれば相川が寶玉を盗んだのは一時前後である。而も中野に氣付かれずに盗んだに違いない若し強奪したとすれば直ぐに警察へ届け出るに違いないから、相川が落着いて附近を

鳥驚々々して居る筈がない。

實を云へば、女も中野が屹度ユーゼーヌ、ホテルへ来て居るだらうとまでは信じなかつた。若し来て居たらよく、自分のことを思つて居るのであるにと其處に多少の期待が無かつたでもないが、云はゞ一種の好奇心に驅られ、約束の時間に兎も角行つて見たのである。處が意外にも中野はチャンと密會の場處に来て居る。女は此時嬉しくもあり又た多少恥かしいやうな氣もした。と、全時に苟且にも此高潔なる紳士の胸奥を疑つたのは、全く女の淺墓からであつた、何と云ふ自分は卑劣の根性を持つて居るのであらう、と非常に自ら恥ぢ且つ悔いた、後に至つて中野と思つたのが兎賊相川であるを知つた時の彼女の失望は何んなであつたらう。

女は勿論中野邸の中野を、最初相川であると思つたのであるが、愈よ眞の相川が現はれ、家人が目を寤まして騒ぎかけた時、中野が男らしく女に逃走を勤め、後の始末は自分が引受けるからと云つた其時から、中野は相川でなく、矢張中野であると感付

いた、如何に大膽機敏の相川でも、眞の中野を面前に置いて、自ら中野に成り濟ますことは出来るものでない。そして窓から飛び降りたら、女は直ぐに走つて逃げるだらうと、中野は思つたのであるが、矢張張相川の疑つたやうに、女は軒下に潜んで暫く中の様子を窺ひ、全く中野の中野であることを確かめたのである。

却説女に盗意があつたか怎うかは解らないが、兎に角女は家宅侵入者として再び捕へたのである。物置部屋に追ひ詰めて、身動きも出来ないやうにせられたのである、女は此場合寶玉と金の巻煙草入を返しに來たのであると、辨解することも出来やう。中野はまた寛大な性質であるから、夫を信じて許すかも知れぬが、今は何と思つてもそれが云へない、前夜は氣分が燥いで居たから、思ふさま中野を翻弄し、寶玉強盜事件に關係した、素人泥棒として一芝居したのである。昨夜のは一場の喜劇であつたが今夜のは悲劇である、否な劇ではない眞實であるから、只だ笑つたり泣いたり、喜ぶべき場合でない。少し嘘を云つたら、或は自分の名譽と自由は傷けられずに濟むか

も知れぬが、女の今の心中はそんなに簡單ではない、心の底の底に自分でも明かに意識せられない、不思議なものが蟠まつて居る、女は怎うかして中野の愛、とまでは望まれぬまでも、せめて其信用だけでも繋いで置きたいと思つて居る、中野が明かに女を思つて居るやうに女も矢つ張中野を思つて居るのである。

朝方分れて以來、女は此はかない希望を懷いて、人知れず心を痛めて居るのである。何故自分が恁んな真似をして居るか、其云ふに云はれぬ苦しい悲しい事情を知つて呉れたら、女の無智と淺慮から起つた、罪の無い寧ろ一笑に附すべき所行として、中野は恕して呉れるかも知れぬ、と心に期待して居るのである。そして中野の自分に對する信用が多少でもあると假定して、それが假令風に揺られて今にも消えさうな蠟燭の火影のやうでも、懸て戀に達する道を照すやうにと、心で祈つて居るのである。然るに此はかない希望は今ま全く消えてしまつた。敷居に突つ立つた儘、幾分冷笑を浮べて、じつと自分を眺めて居る其人の顔には、毫末の同情も慈悲もないやうであ

る。自分は全く頼むべからざる人を頼んで居たのである、と女はつくづく思つた。男は瘠せた、而も筋骨の逞ましい長い體に、イヴニング、コートをやつたり着て、冷靜に女を見下して居たが、終に待ち飽んで再び口を開いた。

「私は待つて居るのですよ、お互の話は直ぐに片付くのですから、早く出て来て下さい」と其口氣は氷のやうに冷かである。

女は臆を剝られたやうに感じた。何時まで此處に居ても際限がないと思つたか、女は残れる最後の力を持つて、つと身を起し、蹣跚しながら漸く廊下まで出た。男はランプを高く差し上げて、背後から道を照しながら、女の跡を追ふて書齋に這入つた。

女は身を投げるやうにして、直ぐ椅子に腰を卸し、わな／＼と身を震はして居る。男は沈着な態度で机の處まで進み、ランプを其所に卸して、瓦斯が明いて居るからランプは不用なのであるが、怎うしたものか吹き消さうとはしなかつた。そして底氣味

の悪ひ冷笑を浮べて、肩を少し聳かし、両手をズボンのポケットに落して、女の方に向き直ほり。

『それで……』とそろ／＼詰問を始めかけたので、女は遽て手を振り、暫くの猶豫を乞ふた、男は點首いて承諾の意志を現はし、室内を行きつ戻りつして居たが、壁根に行つた時に、機械的に手を伸ばして瓦斯の栓を閉ぢた。やがて女の前に立ち止つて再び口を開き。

『お氣分が好くなつたら、徐々陳述を承はりませうか』

『私？、私は何も陳述することはありません』

『えゝ！』と云つて男はランプを背にして、半身を前に突き出し、女の顔をぎろ／＼見詰め『そりや貴女お可笑しいじやありませんか』

『貴方には御満足の行くやうな陳述は出来ません、私……私は貴方が何とお思ひにならうが構ひません』と女は幾分輕侮の色を顔に浮べて『貴方の御勝手になさいませ警

察をお呼びになつても無論異存はありません』

『警察！、其處まで行く必要は無い、と私は思ひますねエ、貴方を牢屋に投げ込むなんて、そんな事をしたら、關係者が皆んな迷惑しますからねエ、が、私は貴女が何故今夜此處へお出でになつたか、先づそれが知りたいのです』と云つて男は嘲笑つた。

女の吸呼は俄かに急迫になつた。若しか取り逆せて、大事な事實を告げては大變であると思つたので、固く口を噤んだが、動悸は益々激しくなつて、今にもヒステリーが起りそうである。

『私はどうも合點が行かないです』と男は一寸小首を傾けて、更に言葉を續ぎ『貴女は屹度邪魔者が這入つて來ると思つたでせう』

『私は貴方に邪魔をせられるとは思ひませんでした』

『或はそうかも知れませんが。併し中野は何うです、此家の主人が何時歸らないとは云へますまい。でなれば……』と云ひかけたが、女の非常に驚いた顔を見て口を噤み

尙ほ暫く女の顔をじつと見詰めて居たが、何か合點が行つたと見えて、くす／＼笑ひ出した。

『これはしたり！、私は飛んだ思違をして居ました、貴女は私を中野と思つて居たのですねエ。いやはや近來の大失策でした。が、併し貴方はほんとに機敏ですからねエ。今日は實に巧く欺まされましたよ、白状します。貴女が餘りお賢いから、何ほ私がお人好でも少しは用心をする氣が起ります、今日はよくこそ探偵を遣して下さつて難有う、改めてお禮を云ひます、併し平田の愚圖でしたから好かつたのですが、若し名倉でも來たのであつたら、今頃は暗い處へ這入つて居るのです。それに至極都合の好い家を指定して下さつたから、お蔭で私は屋根から裏通りへ出敬しました』と意地悪く女を嘲つた。

女が今の今まで中野であると思つて居たのは、意外にも兇賊相川丹次であつた彼は女の目の前で其本性を現はしかけた。此感情の急變と、差しかつた危険に對す

る恐怖は何うして堪ゆることが出來やう。女の顔は見る間に眞蒼になり、目を閉ぢてぐつたり椅子の背に崩れかゝつた。相川は暫く女の様子を注意して見て居たが、やがてランプを提げて廊下に出で、臺所に這入つて、間もなく琥珀色をしたシャンペンを満した杯を持つて入り來り。

『三鞭がありました』と云つて舌鼓を打ち『中野の奴は仲々好い酒を持つて居ます、私も二三杯引つかけましたが素敵です、サア、ぐつとお飲みなさい』と云つて咽せない用心に、女の首を少し上げて、唇に杯の縁を當てた、最初一口二口はブル／＼と吐き出したが、三口目からは能く納まつたらしく、効能は忽ち現はれて、女は微かに目を見開き、其頬には血の氣が薄すら潮して來た。

『先づ之で安心した。もうつまらない話はお癪めにしますから、餘りじらせずと直ぐ私の質問に答へて下さい。ちつとも恐れることはないです。今日貴女が私に仕向けた事を、深く意に介して居る譯じやないのです。貴女の勇氣と膽玉には誰よりも敬服し

て居る一人です。私の本心は全くの處此通りなのですが、併し貴方はあの寶玉を何處へ遣りました」

「寶玉？」

「呆けちや可けません、お互に解つて居ることじやありませんか。サア何處にあるのです」

酒の効能で女は氣力を恢復すると全時に其機智も盛んに働き出した。相川が如何に壓迫を加へても、そう容易くは屈服せない。

「其事は一切申しません」

「云へない？、と云ふのは此處にあると白狀するも全じですよ。兎に角私は夫れを頂戴しやうと思つて來たのですから、其覺悟をおしなさい。若し貴女が卑劣なことをするならば、私にも考がありますよ、サア何處です」

「今も言へないと云つたじやありませんか」

「私はまだ貴女のやうな圖太い女を見たことがない」と云つて一歩女の方に近づき、手荒く其手を攫んで「サア云ふのです」

「どふぞ、放して下さい」と女は腕いたが、相川は序に一方の手も捕へて。

「怎うしても云はないですか」

「厭です、どふぞ放して下さい」と云つて女は立ち上らうとした。

「云へ！」と相川は荒々しく云つて、女の手頸を締めた。

相川の手にかゝつたら、女は宛然小供のやうであるが、それでも一生懸命に手を振り放して立ち上らうとするので、相川は益々強く手頸を握り締めた。女は苦しさに堪えずして、覺えず叫び聲を發し、死物狂になつて腕いた。其拍子に椅子がガタンと床の上に倒れた。家が静であるから可なり大きな音がしたので、相川が一寸驚いて少し手を緩めた隙に、女は素早く相川の手を振り放して、入口の方へ逃げ出した。相川は直ぐに其大きな手で背後から女の肩を緊かり攫んだ。

「此畜生！」

「厭やく」と女は益々聲高く叫ぶので、相川は不圖氣を換へて、全く手を放し、入口に立ち塞がり。

「貴女、馬鹿な真似をしては、お互の爲めが善くないですよ。今ま椅子が倒れた時に私は冷りとなりました」と少し柔しく出た。

女の唇には尙ほ嘲りの表情が見えて居たが、敵が穩かに出れば、強いて事を荒立てるにも及ばない、相川の云ふことにも一理はある、と思つたから相川の態度を注視しながら、二三歩退いた。

「寶玉は屹度此處にあるのだ」と相川は獨り首肯き「此處にないものなら、貴女が恣んなに頑固に抵抗する筈がない、だから、もう貴女の力を借りずに私が獨りで捜し出します、安心して其處へ御懸けなさい、二度と貴女の體に手を觸れませんか」
女は只だ相川の命令に服従する外はなかつた。今の努力は腕弱い女に取つては除り

に烈しかつた。既に争ふ勇氣を費し盡したので、恐を懐きながらも止を得ずして安樂椅子に倒れるやうにして腰を卸した。

相川は暫く四邊を見廻して居たが、やがて机の前に行つて椅子に腰懸けた、彼は机の上にあつた鍵を取り上げて。

「貴女怎うして之を手に入れました」

「大方中野さんが置き忘れたのでせう」

「不思議なこともあるものじや、先刻私が表の扉を開けやうと思つて、鍵を弄つて居た處へ、佐助がビールの瓶を以て歸つて来たものですから、到頭見付かりました。併し先生頗る呑氣なもので、私を中野と計り思ひ込んで、青野村行の最終列車が間に合はなかつたかと訊くのです。私が其通りだと云つたら先生非常に同情して、直ぐに扉を開けて入れて呉れました。で、私は其時鍵を何處かへ置き忘れたと云つて誤魔化し今ま二階へ上る時には夫れを繰返したのですが、夫れが偶然事實に合つて居るのです

から不思議じやありませんか。おや、貴女の手袋が此處にありますよ、貴女は又しても證據品を置き忘れますが、何ぼ紐育の探偵が野呂間でも、之れでは助かりつこがありませんよ」と云つて相川は其手袋を女の膝に投げ、全時に鋭い眼で女の顔を眺めた女は若しか寶玉の隠し場所を嗅付かれはせないかと氣が氣ではなかつたが、相川が直ぐに話しを續けたのでホツと安心の氣息をした。

『私は先輩として一こと二こと貴女に教えて上げたいのです』と云つて微笑しながら女の様子を眺めて居たが、やがて言葉を繼ぎ『貴女は仲々喰へない處があるやうでも矢張普通新米のする失策が幾らもあります。併し今一氣息脩業したら貴女は確かに我々社會で頭角を現はすことが出來ます、また其脩業も存外早く出來るだらうと思ふのです』

女は相川が妙なことを云ひ出したので、其眞意を測りかねて、不安の念に驅られ、内心大に警戒する處があつたが、努めて何氣なき態度を装ひ。

『御親切に難有う。併し貴方早くなさらないと……』

『ナニ、急ぐことはないです。中野は青野村へ歸つたのですから、少くともまだ五六時間は大丈夫ですよ、佐助は私を中野と計り思つて居ますし、夫れに先生、早やビールの瓶を提げて歸つた時から少し酔つて居たのですから、もう大分酔が廻つて居る時分です、だから此方は少しも心配はないのですが、何うです、貴女、一つ思ひ切つて遣つて見ては。つまらない事をくよくよ思ふより、先づ貴女自身の利益を考へては何うです』

『何の事を云つてらつしやるのか、私には頓と解りません。若しか貴方は……』

『いえ、私は中野の事を云つて居るのです、貴女、奇麗に忘れてしまつては何うです貴女のやうな容色と才氣を持ちながらですネ、彼ののつぺりした資産家の息子と偶然月夜に邂逅して、假令何んな話があつたか知りませんが、夫れが爲めに頭を轉倒させるのは、餘り大体無いじやありませんが、マア能く考へて御覽なさい、貴女と中野』

とは元々何の關係もないのじやありませんか。其無い關係を絶つた處で、貴女は痛くも痒くもありませんまい、失ふものがあつたら夫れはつまらない空想ばかりです」

女は膝の上に載せた手を、堅く握り締めて感情の發作を喰ひ止め、靜かに相川の言葉聞いて居た。女の頭の中には二つの衝突した感情があつた、今ま目の前に居る女は蛇蝎の如く忌み恐れて居るが、中野と全じやうに自分の才色に對して敬意を拂つて呉れるのは、萬更腹も立たない。併しそれを兇賊の口から聞くのだと思ふと、慄然として恐れ戦かざるを得なかつた。

『妄想が空想か、そんなものは疾くに無くなつて居ます。でなくつて貴方……』と云つて一寸目を上げて相川を眺め、強いて微笑した。

『サア、其處です。今ま私が云つて居るのは』

『それで私が其空想を棄てたら、貴方は代りに何を與らうと仰しやるのです』と少し調子づいて女は訊いた。

『そうですねエ。何と云つて宜しいか、つまり互惠的のもので、貴女が十のものを下されば、私も十のもの若しくはそれ以上のものを差上げます』と云つて相川は女の顔を覗いた。

『何だか廻りくどくて私には解りません、もし明瞭云つて下さい』と女は覺悟を定めて促した。

『貴女は最初中野を私とばかり思つて居たのでせう、何故ほんとの私を思つて下さることが出来ないのです、私も男として敢て中野には劣らない積りです、自慢じやありませんが、本音を吹かして御覽なさい、之でも仲々面白い處がありますよ。どふか私の味方になつて下さい。出來得る限りの親切を盡し、満心の愛情を注ぎますから、貴女の才色と私の熟練があつたら、此新大陸は愚か世界を股にかけて、何んな大仕事でも出來ます』と相川は女の顔を惚々と眺めながら熱心に説いた。

『そうですねエ』と女が曖昧に云つたのを承諾に近い意味に取つて、相川は一層乗り

氣になつた。

「今から直ぐにでも仕事は出来ませんが、あの寶玉はまだ顔も見ないのでですから、一先づ私に渡して下さい、そしてお互の結婚の時に、貴女に返して差上げますから。こんな立派な結納は貴女滅多にありませんよ」

女は屈服するか、飽くまで拒絶するか、愈よ二者其一を撰ばなければならぬ破目に陥つた。兇賊の意志と体力の強い壓迫を感じて女は相川の視線を避けた、如何にして此壓迫を脱すべきかと様々に心を碎き、一時欺いて此場を逃れやうかとも思つたが此悪徒に屈するのは大なる恥辱であると思ひ直した、と、云つて今は袋の鼠も全じであるから、何うすることは出来ない。廳で相川は立ち上つて女の方に近づき、全じ長椅子に腰を懸けた。顔と顔との距離は一尺もない、相川の眼には危険な或ものが輝き今にも其強い腕が女の腰に廻りそうである。女は恐れて少し横に寄つた。

「逃げなくつても好いじやありませんか」

「私はまだ貴方の眞意が能く解らないのですもの。今日貴方を巧く騙ましたでせう、そして貴方を敵に賣つたでせう、だから、貴方は屹度復讐する積りで居らつしやるのです、私し疑い深いんですからねエ」

「だから、私は此通り貴方に哀願して居るのです。貴方のやうに人を誑かすことが無骨の私に出来るものですか、まだ解りませんか」と云つて相川がにぢり寄つたので、女は彼の暖い氣息を感じた。

「貴方のやうな才色兼満の佳人に見捨てられたら、何んな男でも終世苦痛を忘れることは出来ません、解りましたでせう」

「どふもまだ」と云つて女は立ち上つたが、其時丁度表で馬車の響がしたので「一寸貴方、馬車が来るやうです。今時分不思議ですねエ、若しか……」

「ナーニ、そんな心配があるものですか。それ止つたでせう」

「此家の前じやありませんか」

『少くとも二三軒向ふです。脩業と云ふのは此處の事です。響で距離を知る位なことが出来なくつては駄目ですよ』

『でも貴方危険ですよ、それ！、今の戸を閉めた音は慥かに此家です』

いかにも事實である。此家に人の這入つて来たことは明白である。相川は無言で机の方に歩み寄つて直ぐにランプを消した。

『しつかりなさい、別段恐れることはないですが、愚圖くしては可けません。靴室

へ這入つて窓からお逃げなさい。或は中野が歸つて来たのかも知れませんが、サア早く

お逃げなさい。私も直ぐ後から参りますから』

『でも貴方は居残つて怎うなさるお積りです』

『それは私にお任せなさい私はまだ捕つたことは無いのですからねエ。ナーニ、人間の一人や二人は……』

女は相川の恐ろしい企謀を直覺して慄然とした。

『早く！』と相川は促した。

『入口は何處です、暗くて薩張分りません』と女は態と呆けて鳥驚々々して居る。

『此處です』と相川は手を伸ばした。

女は暗中を索つたが、直ぐ相川の手が當つたので、其手頸を堅く握つた。屹度ピストルを持つて居るに違いないと思つたから、更に今一方の手を索つた。果して冷たい堅い、滑かなものが當つたので、女は其手をも緊く攪んだ、相川は猛烈に女を突いたが、恐怖に心を支配されて居るからであらう、夫れでも女の手を振りほどくことが出来なかつたので、今度は女を宙に上げて、容赦なく前後左右に振り廻した、併し女は獲物に噛りついた、ブルドッグのやうにいかなこと其手を放さなかつた。が、それが何時まで續ぐであらう。女は次第に力の弱つて来るのを感じた。

十七 寶玉泥棒を挫ぐ

中野は七時頃宅を出で、辻馬車に乗つて倶楽部へ行つた。玉突室に這入つて見たが今日に限つて何と思つてもキューを握る氣になれなかつたので、食堂に入つて席を取り、此日の夕刊と晩食を注文した、夕刊はどれもこれも前夕青野村の自分の本宅に起つた出来事を業々しく書き立てゝ居る。狂中野が殿様丹次を縛つたのが、相川博士が中野丹次郎を縛つたのか二人共行衛か解らないから、事件の真相は五里霧中に彷徨ふて居る。警察本部は今ま全力を傾注して相川を搜索して居る。と云ひ、二人の寫眞は勿論、中野邸の平面圖まで掲げて居るので、中野は先づ胸を悪くし、晩餐は機械的に済まして喫煙室に入り、葉巻を燻らせながら色々考へて見たが、大原の處分をせなければならぬと思つたから、此夜は青野村へ歸宅することに漸く決心し、佐助を電話口呼び出して其由を告げ、一切自分の所在を人に告げぬやうにと注意し、直ぐに着換を持つて来るやうにと命令した。十時四十五分頃に倶楽部の給仕が一葉の名刺を差出したが、見れば或夕刊新聞の記者であつたので、應接室に案内するやうにと命じて置

いて、裏門から窃つと抜けて出て、直ぐ辻馬車に乗り停車場をして急いだが、僅か三分の違いで青野村行の最終列車に乗り後れた。是非歸らなければならぬと云ふのではないから、彼は別段失望はせなかつた。で、直ぐ引き返して、青野坦と云ふ偽名で、名もない旅館で一夜を明かすことにした。彼は直ぐ寢室に這入つて、寢臺に横つたが、容易に寢つかれない。過ぎた廿四時間に起つた様々の出来事が、活動寫眞のやうに、次から次へと浮んで来る。最も鮮明に且つ強く浮んで来るのは鼠の女のこと、其過去の生活、殊に女を罪惡に陥つた残忍なる境遇を色々に想像し、女の將來の運命に考へ及ぼし、我事のやうに恐れ且つ心配するのである、まだ二十才前後であるが身体の發達も好く、高等の教育もあり、容貌が群を抜いて美しい上に、氣品があつて愛嬌があつて、感情が鋭敏で、恐ろしく機才に富んで居る。此女を一度自分の腕に抱き、其星のやうな美しい眼に眺め入り、香ばしい其呼氣を吸つたのであると思ふと、慄える程嬉しさを感ずる、と、全時に一種の

恐れを経験するのである。彼女の歩める道は耕棘と陷穽に充ち、絶えず法律の追求を受けて風聲鶴唳に驚き、自由を持続せんが爲めには、在ゆる工夫策畧を弄せなければならぬ。之に反して自分は危険のない名譽の道を取つて居るのであるから、この二つの道は丁度十字に交叉して居るのであつて、永久に相會するの機會が無い、と、思ふと中野は堪え難き憂愁寂寞を感じるのであるが、而も事實は否定することが出来ない妙な事情からして偶然邂逅し、自分は普通人情の道を踏んで彼女を助け、彼女は其報酬として自分の財産を一時保護して呉れた。關係は夫れぎり、今では孰れが孰れの一方にも負ふ所はないのである、彼女は恁んな水臭いことを思つて居るのではあるまいか、と思ふと何だか腹立たしくなつて来る。一寸舌打して彼は此怒を混らすべく、寢臺から降りて窓際に立ち、窓框に肱を突いて外を眺めた。

氣分が鎮まるに伴つて、彼は不圖自分の囊中の殆ど無一物なのに氣が附いた。此所へ着いた時に大方御者にはたいて與つてしまつた、宿料も覺束なく、朝食は無論食へ

ない、本名を明せば譯はないが、恁んな旅館に泊つたことが知れたら、又々嘲笑の種になるから、どふしても偽名で通さなければならぬ。小幡か誰かに電話で云つて遣つたら、直ぐ金を持つて遣すであらうが、夫れには面倒な説明をせなければならぬ。之れも厭である、つまり宅に歸つて寝ることにした。彼は早速給仕を呼んで、肝心な用件を忘れて居たから、遅くても是非友人を訪ねなければならぬ、と云つて財布をはたいて纏頭を取らせ、直ぐ表へ出た。

一町計り歩むと、幸ひ馬車があつたので、夫れに飛び乗つて、全速力でやれと命令した。御者は何う番地を聞き違へたものか、三軒ほど手前で馬車を止めたので、中野は面倒であつたから、直ぐ其處で飛び降り、御者には暫く待つて居るやうにと命じて鍵を手を用意しながら歩道を傳つて自分の家の入口に急いだ。此時家の表の石段から四五間右手に、一人の巡査が立番をして居た。そして隣の家の軒下から黒い影が現はれ、急いで中野の後を追ふた、どふやら中野を入口で遮らうと思つて居るらしい。中

野は少しも夫れに氣が附かなかつたから、手早く扉を開けて内へ這入り、外側のつまみを放すと全時に、内側のを取つてガタンと内から締めた。其扉が彼を追つて來て將に敷居を跨げやうとした黒い影の鼻先に來たので、黒い影は驚いて一步飛び退いた。其間に中野は錠を卸して一階へ上つた、黒い影は一寸扉を開け試みたが、元より開くべき筈がないので、非常に苛つて門番と記した呼鈴の鈕を幾度もく押へて居る。中野は闇黒でも勝手が能く解つて居るから、直ぐ二階に上り着いて、書齋の扉を開いた。先づ彼を驚かしたのは瓦斯燈が一つも明いて居ないことで、室内の空氣は馬鹿に蒸し暑く、厭な石油瓦斯の嗅氣がする計りか、妙な嘯き聲が聞え、黒い影が闇中に蠢めいて居るやうに思はれた、鋭い叱り附けるやうな喘き聲がしたかと思つたら、忽ち一發の銃聲と共に、橙黄色の閃光が天井を射つた。此光で覺束ながら自分の今ま如何なる位地に居るかを知つたので、中野は相手が何であらうが誰であらうが頓着はない。手に觸つたものから一々攫み挫いでやらう、と大膽にも奥の方へ猛進した。何か

柔いものが自分の肩を拂つたと思つたが、全時に男の呪いの聲とそれから苦しさの泣き聲のやうでもあるが、確かに勝利の調子を帯びた女の叫び聲がした、此瞬間に中野は賊の手をぐつと攫んだ。其拍子に頭と頭とが衝突したので、双方共一寸たちろいたが、中野は直ぐ絨氈に足場を堅め、全力を籠めて攫んだ賊の手の引つ張つた。賊はよろめきて床の上に膝を突いたやうであつたから、手を伸べて索つたが、丁度敵の頸が觸つたので、両手の指が肉に喰ひ込むほど堅く、賊の喉笛を攫んで締めた。此時バツと燐寸を燈つたかと思つたら、忽ち瓦斯燈が煌々と輝いた、中野が今ま喉を掴んで居るのは自分と瓜二つの男であつたから、彼は覺えず驚の叫び聲を發した。相手は兇賊相川丹次であつた。それよりも尙ほ彼を驚かしたのは、瓦斯架の眞下に立つて居る女であつた。右の手にはまだマッチの燃え残りの軸を持ち、左の手にはピストルを持つて居た。中野が夢にも忘れぬ鼠の女である。二人の視線は期せずして相會した、女の目には燃ゆるやうな喜びの情が輝いて居たが、それが消えたかと思つたら

此度は満面に哀求嘆願の切なる情が表はれたので、中野は此女が何であらうが、何んな罪惡に身を汚して居らうが、自分の財産は愚か生命を犠牲としても最後まで保護してやらうと決心した。戀は確かに盲目である。

中野の感覺は今ま非常に鋭敏になつて居ると見えて、地下室の佐助の部屋の呼鈴が激しく鳴り、佐助がブツ／＼云ひながら、地下室の階段を登りかけたことを知つた。夫れと全時に警官か新聞記者か、孰れにしても外來者があるものと解つた。中野は相川の喉を締めながら、眉根に皺を寄せて一寸考へたが、何を思つたのか、其締めて居た手を放すと全時に、女の方に走り寄て其垂れた左手を掲げて拳銃を靜かに取つた。階下では助佐が漸く表の入口まで上つて來て、外來者と何か荐りに争つて居るらしい中野は今日計りは佐助の愚圖を却つて難有く思つた。

相川は手を握り締め、齒を喰ひしばつて突つ立ち上り、今にも飛び蒐らんとする態度が見えるが、中野の持つて居る自分のピストルを恐れて躊躇して居る。中野は如何して相川を處分し、又た女の名譽を保護しやうかと一寸苦悶したが、やがて吃度決する處があつたと見えて、ピストルを相川の鼻先に突きつけて。

『其處の壁を背にして立つて居るのだ』と嚴かに命令を下した。手に何の武器も持たない相川は只だ／＼中野の命に服する外はなかつた。中野は又た女に對して。『貴女は直ぐ次の間の床にお隠れなさい、私が呼ぶまでは些しの音も聲もさせては可けません』と命令したが、此間中野の眼は絶えず相川にも注がれ、寸分の隙をも見せなかつた。女は中野の眞意を酌みかねて、甚く心配して居るやうであつたが、之れまた中野の命令に服従するの外はないので、直ぐ次の間に隠れてしまつた。中野は再び相川と向き合つて。

『お前のポケットを引つ繰り返すのだ。可成手早くしないと、警官が上つて來るよ、階下に来て居るのだから』と嚴命した。相川は直ちに両手をポケットに突き込んで、其中のものを悉皆床の上に打ち空けた

帆木綿の袋が出て来ないので、中野は甚く失望したが、最早訊問する餘裕はない。僅か一秒で計畫が全く失敗に終るかも知れないので。

「それで好し、では、お前は此廊下の端に鞆室があるから、其處の窓から逃げるのだ廊下の右側だ」

「解つて居ります」

「お前のことだから、其邊はぬかりはあるまい、サア早く」

相川は普通の場合であつたら、中野が二度ならず三度までも自分の宅に忍び入つた強盗を警察の手に渡さず、却つて保護を與へる其大度量、と云ふよりも寧ろ狂氣染た處置を批評的に考へて見たかも知れないが、今はそんな餘裕は微塵もない。彼は此夜ほど警察の長い手が、其咽喉に迫つて来たことはないのであるから、中野は「サア早く」と促すまでもなく、廊下に出で忽ち姿を隠してしまつた。

中野も續いて廊下に出で、天井に向つてピストルを二度連發した。戸が閉め切つて

あるから、其響が家中に反響した。と、全時に何處かで硝子の碎ける音がした。煙は室内の静止した空氣の中に尙ほ漂ふて居たが、階下から四人の男が上つて來て空氣を動搖させたから、直ぐに夫れが散じてしまつた。

十八 少々間拔けた探偵殿

一番先きに立つて居るのは、青服に眞鍮鈕の制服を着し、ヘルメットを被つた本部警官で、右手に拳銃を提げ、左手には捕繩を持つて居る、其背後に居るのは春の低い丸々と肥つた男で、黒の山中帽を少し阿彌陀に被つて居る、埃塗れの古けた絹帽子被た御者の肩越しに、佐助の激昂した顔が見える。

「皆さん、どふか、お這入り下さい」と中野は愛嬌よく一同を迎へ、先きに立つて書齋に入つた。まだ薄すら煙の出で居るピストルを机の上に置き、不圖思ひ附いたやうに。

『佐助は直ぐ下に降りて、表の番をするのだ、人がどや／＼這入つて來たら困るから誰が何と云つても、一切内へ入れることはならないよ』

佐助は太儀そつに階下へ降りると、警官と探偵は互ひ違ひに質問を連發した。中野は机の端に手を突き、少し上半身を横に傾けて立ちながら、冷静に質問に答へた。

『何うした憊うしたはないので、只強盜が押し入つたと云ふまでです、まさか夜の今時分に射的をやるものもありますまいテ』

『強盜は何方へ逃げたのです』

『非常口から裏町へ逃げただらうと思ひます。私は追つ驅けて二發放つたのですが、どふやら當らなかつたやうです。敵も武器を持つて居ますから、飽くまで追求する勇氣も出なかつたのです』

やがて探偵平田は少し前に進み出で、中野を一寸尻目にかけて、正服巡査に對し。君は彼方へ行つて、此男の云ふことが事實に相違ないか、一つ見て來て呉れ給へ、

此男は僕が相手にするから』

中野は此二日計り氣分が沈み勝ちであつた其反動とでも云ふものか、探偵の此侮つた口調に對して別段腹を立てず、否な、却つて可笑しく思つた位で、先方の出やうに依つては大に翻弄してやるのも面白いと思つた。で、巡査が出て行くと。

『時に貴方は？』と笑ひながら訊ねた。

平田は悠々迫らざる態度を装ふ積りか、室の隅にある薩摩燒の唾壺まで態々行つて唾を吐き、廳で立ち戻つて中野を正視し。

『まだ會つたことは無かつたかねエ』

『不幸にして未だ拜顔の光榮を得ないやうです』

『フム、随分物忘れの好い男もあつたものだ』と中野の驚いたらしい顔を見て居たが、唇のピリ／＼と震へた處を見ると、平田は内心大に憤つて居るやうだ。彼は更に言葉を繼ぎ『私は平田と云ふものだ、お前の記憶は一寸休暇をして居るやうだが、此

度こそは明瞭と記憶に止めてやるよ』

『是は妙なことを承ります、何だか味噌に骨のあるやうなお言葉ですが、少しお謹みにならないと、お爲めが好くないですよ。私は義務としても貴方を外へ掴み出さなければならぬですから』

『記憶に無いと云へばそれまでのことじや。呼び返す記憶がないのなら、新たに駈寄り記憶させてやると云つたのだ』と云つて、平田は上衣の裏のポケットかち官名の入れた一葉の名刺を取り出した。

『果然探偵の方でしたか、いや之は仲々面白くなつて来ました』と中野は愉快そうに云つた、其處へ正服巡査が這入つて来て。

『非常口へ通ずる窓が破れて居ます。そして梯子を傳つて誰か降りた形跡が確かにあります、もう人の影は見えませんが』と報告した。

『左様だらう、假令君が徹宵裏に立つて居たつて人の影の見える筈が無いんだから』

と平田は皮肉つた。

『普通の賊じやないのですからねエ。若し裏に手が廻つて居ると知つたら、此度屋根傳をするだらうと思ひますねエ』と中野は平田の説に賛意を表した。

『お前は仲々詳しいやうだねエ。併し屋根傳の講釋は後で緩くり聞くこととして……』と云ひさして平田はつと前に進み、中野の両手を捕へたので、中野は驚いて飛び退つたが、もう遅かつた。自分の両手には早やチャンと手錠が箠つて居た。彼の顔は見る／＼朱を注いだやうに熱して来て、次の間に女の隠れて居ることも忘れて。

『何をするんだ、畜生！』と手錠を鳴らして怒號した。

『そう怒らなくつても好いじやないか。もう何ぼ搔いても駄目だよ、素直に裁判所まで行つて、そして若し辨解があるのなら其處でしたが好からう。中野丹次郎君か、夫れとも兇賊相川丹次か、ナニ直ぐに解る話だ、此度は冗談じやないから、お前も立派に覺悟を極めるのだねエ』と云つて平田は口を噤んだ。

彼は圖々しい相川の面皮を完膚なきまでに、剥ぎ、思ふ様罵倒して遣りたいのであるが、其言葉に究るので、窃かに自分の訥辨なのを残念がつて居る。中野は一時怒つて見たが、其怒が薄らぎ、頭が少しく冷静になると共に、此場の光景の如何にも滑稽的なのに氣が附いて、俄かに可笑しさを感じて來た。併し笑つてしまへば此喜劇が夫れで終るかも知れないので、彼は態と真面目な顔をして。

「さあ、どふぞ引き立て下さい。もう憐うなれば私も覺悟をします。道がに米國のセヤロックホルムと呼ばれる平田さんの腕前は凄いです。今日と云ふ今日つくづく覺りましたねエ。どふして貴方にかゝつたら私如きものはかくもう駄目です。併しです。之は一つ真面目に申し上げたいのですが……」と云ひさして可笑しさの涙を拭はうとしたが、手錠に妨げられて「イヤ之は恐れ入りました。で、私は真面目にお訊ねするのですが、折角非凡の腕前を無益にお使ひになつては居ないですか」

此時正服巡查も少し疑ひ始めたらしく、平田の顔横目に見て少し心配した様である

御車は最初から腑に落ちないので、入口の柱に凭れて間斷なく煙草を喫かしながら、中野の語る一句毎に會心の點頭をして居る、併し平田は何處までも追求の手を緩めず。

「これは痛み入つた、お前が呉れる讚賞の辭は社會から貰ふ頌徳表のやうなものだから難有く頂戴する。尤も自分に其値打があるか何うか随分怪しいものだ。お前には一日の間に二度まで巧くやられたからねエ」と云つて巡查に向ひ「併し到頭やつつたよ、之を見給へ」とポケットから新聞を取り出して巡查に示し「其肖像を見給へ、生寫しだらう？」

巡查は新聞と中野を交代に見て比較したが、何だか怪しいものだと言はぬ計りに眉を擡めて居る、御車も首を突き出して新聞を見た、中野は一家の私事を崇破抜いた此新聞を思つてさへ慄然とするので、内心の堪え難き悶えが顔にも現はれた。

探偵平田は同僚に對して矜り顔に云つた。

「まあ聞いて呉れ給へ。此相川の中野には今日二度出遭つたのだ、一度は此表で見附けたのだが、中野に違いないと思つたから、一緒に晝餐までやつたのだ。二度目は本部の命令で、第一百八街で見張つて居た時、ひよつくり出會つたのだ、矢つ張中野に違いないと、自分は思つたが、此男の驚いた様子が少し變であると思つた、併し別に考へあつたから逃がして置いて跡を躡けたのだ。僕は餘り大膽過ぎたねエ。到頭踪跡を晦ましてしまつた。其處で屹度此處へ舞ひ戻るに違いないと思つたから、一旦本部へ歸つて君の應援を得て此處へ來たやうな譯なんだ。此新聞は本部へ歸りがけに御車に買はせたのだが、若し間違があつては可けないと思つて之れで能く二人の肖像を比較して置いたのだ」

「巡查は此説明を聞いて、平田に充分確信があることを知つたので、太い奴だと云はぬ計りに中野を眺めて澁面を造つたが。御者はまだ腑に落ちぬかして、汚れた手で鼻先を撫でながら考へて居る。」

「一寸お訊ねしますが、貴方は何時頃から此表に見張つてゐらしたのです」と中野の目は輝き出した。

「お前の歸る五分程前からだ」と素氣なく答へて『さあ、それでは……』と引き上げの支度を促した。

「成程、貴方も大分苦心したと見えますねエ、併しどふぞ引き立つて下さい」

「無論のことだ。これで最後の目的は達したが、お前のお蔭で私も大分白毛が増した」

「でもありますまいが、今ま貴方は私と此表で出會つたと仰しやつたですねエ、夫れは何時頃のことです」

「能く時間を尋ねる男だねエ、もう誤魔化しは利かないよ。お前は私をユーゼーヌ、ホテルまで引つ張つて行つたじやないか」

「それで貴方は何時にホテルを出ましたか」

『二時頃だつたらうねエ』

『では一つ改めて門番の佐助の陳述を聞いて戴きませう、略ぼ一時頃まで私が此處に略衣とスリツバーの儘でゐたことは佐助が知つてゐます。それから四時に佐助が二階へ上つて来るまで約二時間は、貴方の友人の相川君のお蔭で、私は猿轡を箠められ、手足を縛られ、昏酔した儘喫煙室の長椅子に横はつてゐたのです。で、私が百十八街で貴方に遭つたのは何時です』

『丁度七時だつた、お前がひよつくり來たのは』

『では、御心配は無用です、七時十分前に私は此處を出て、馬車で俱樂部に行き、七時には丁度晚餐をしてゐたのですから』

『も一つ慥かな證據には、私が貴方を俱樂部まで送りました』と御者は口を挟んだ。

『難有う』と中野は御者に目禮して更に平田に向ひ『貴方は七時から何時まで私の跡を躡けたと仰しやるのです』

『そうだねエ』と探偵平田は少し周章へ氣味になつた。

『解らなければ夫れで宜しい。私は十一時十五分まで俱樂部にゐたのですから。で、是等の點は不問に置くとしても、甚だ辻褄の合はないことがあるじやありませんか。私が二度まで貴方を巧く騙したとしたら、貴方が跡を躡けてゐらつしやることを私が知らぬ筈はないでせう。然るに十五分前に平氣で馬車に乗り、此巡查さんが逃亡者じやないかと疑はれる程の急速度で馬車を驅けらせ、そして馬車から飛び降りるや否や遽だしく二階へ上つて、三度までピストルを發射したのです、賊は此處に居りますと態々貴方がたの注意を呼ぶやうなものです。そんな非常識なことが出来るものでせうか』

平田の腮は少し緩んだ。御者は其太い掌で口を蓋ふて笑を殺してゐたが、やがて平田に向ひ。

『貴方、もうあれで解つてゐるじやございませんか』と呟いたが、平田は努めて自分

の面目を維持しやうと思つたか、態と肩を聳かして。

「まア點つて見て居れ、僕は能く此男の性質を知つてゐるのだから、仲々喰へた奴じやないのだ。今度と云ふ今度は僕も覺悟をしてゐるのだ、處で、お前が此男を俱樂部へ乗せて行つたと云ふのが僕には解らないが……」

「御面倒でも聞き下されば私が其説明を致しませう」と中野は口を挟み、青野村で始めて相川に遭つた時から今まで、廿四時間に起つた出來事を簡單に話した。尤も此陳述は、多少嘘が混つてゐた、中野は大原を驚して窓から逃げたのを自分のやうに云ひ成し、又た鼠色の服装をした怪しい女のことは噫にも出さなかつた併し他の部分は悉く事實であるから、大抵之れで合點が行きさうなものであるが、平田は顔として自分の見解を固執し、中野が語り終ると、そんな戯けた辨解に騙される私ではないと云はぬばかりに微笑して。

「お前は仲々好い頭を持つて居る。其達辨で以て裁判所で争つたら無罪の判決は受合だ。まだ裁判までは、日數があるから、其間に能く考へて置くさ。お前は無論寶玉を手に入れただらうが、全体何處へ隠して居るのだ」

「金庫の中にあります」と中野は心持ほど視線を次の間の方へ遣つて、眞赤な嘘を云つた。まだ平田を弄る積りなのである。

「誰の？」

「無論僕の金庫にです。私の財産を私が盗んだと云つて、貴方がたは騒いで居るのですか、恐らく這んな滑稽はありますまいねエ」

「まア、何とでも云ふが好からう。併し辨解は充分に聞いたから、君、此奴を警察へ引き立て、呉れ給へ、告發は僕がするから……」

「巡査は斯く云はれても少し躊躇して居るので、平田が更に促がさうと思つて口を開きかけた處へ、佐助が鳶色の包み紙に包んだ小荷物を抱へて、ぬつと這入つて來た。

一同の視線は佐助に注がれた。

「旦那様、一寸申上げます」

「何か用事か」

「へ、いや、あの入口の群集は皆んな散つてしまいました。巡查さんが二人来て呉れましたから、何のことは無い蜘蛛の子を散らすやうなものでござえます」と報告し。探偵平田に向いて「巡查さんが御用は無いか、聞ひて見て呉れと云はれましたが」と云つたので、平田は制服巡查に向い。

「君、僕が今云つたことは解つて居るだらう？」

佐助はお客様には頓着なく、中野の前に進んで彼の小包を突き出し、頓狂な聲で。

「私はこれが今日強盗の取つて歸つたものじやねエかと思ひます。十一時頃に一人の若者が遣つて來まして、直ぐ旦那に渡して呉れと云つて之を出しました、紙は元から此通りに裂けて居ました」と云つたので皆の注意は此小包に集つた。

「直ぐにそれを開けて見るが好い」と佐助に命じ、平田の方に向き直つて「これで説

明したら多分貴方も御得心が行くだらうと思ひます。貴方の御友人は晝餐の時に何んな服装をして居ましたです」と問ふた。

「鼠色の縞の脊廣でした」と平田は厭々に答へた。

「それなら此處にあります。皆んな揃ふて居ります、それ靴足袋でも」と云つて、佐助は一々衣類を椅子の脊に懸けて垂らし「それから此手紙が這入つて居ました」

「直ぐに探偵さんに渡して呉れ」と中野は指圖した。

平田は此手紙を受取り、眉根に皺を寄せて、一寸封皮を一見し、聽て中から一通の書簡を取り出して讀み上げた。

拜啓只今貴下御所持品の一部を返却致候は決して好意に出づるに非ずして何か迂生が爲にする處ありての事なりと慧眼なる貴下は直ちに觀破せられ候事と愚考仕り候要するに迂生の目的は貴下の御在宅なりや或は御外出中なりやを探知せんと欲するに外ならず候御外出中なれば直ちに訪問可仕若し御在宅とあらば暫く遠慮仕り候

不思議な御縁にて昨夜以來被りたる御厚情に對しても一應拜趨貴面上陳謝致度は山々に候へ共遺憾ながら事情之を許さず不惡御了承相成度候、孰れにしても御大切の品物を無斷借用致したる罪に對しては只管御寛容を願ふ外無之候、一時此御品に依りて非常の便宜を得候も不圖した事より全く不用に歸し候、這般の事情は平田讓二とか申す少し魯鈍な探偵殿より御話申上ぐべく候 草々敬具

中野丹次郎様

泥棒博士 相川丹次

「花押までして居ます」と平田は附け加へ非常に綱返つて居る。

「もう之で貴方も御得心が行きませう」と中野は平田の顔を覗くやうにして云つたが平田は之に答へず、直ちに中野の前に進んで手錠を外し面目なげに頭を搔いた。中野は愉快そうに微笑して一寸脊伸をなし。

「どふも難有う、貴方は之れで能く私の記憶に留まりました。もう生涯忘れつこはありません」と云つて机の上の鍵を佐助に投げ渡し「茶筆筒にウヰスキーやビールがあ

る筈だから、下の巡査さんも御一緒に案内して皆様に一杯差上げて呉れ、御者にはいま一つ用事があるから残つて居て貰ひ度い。それでは失禮致します。平田さん又たどふかいたして下さい、明日にでも若し御用がありましたら何時でも面會致します。若し外出して居ましたら佐助が居處を申し上げますから……さアどふか何は無くとも嫌疑の晴れた祝ひの酒として御過しなさつて下さい」と云ひつゝ送つて出たが、忽然佐助を呼び返して。

「彼の人達は少くとも一時間は止めて置くのだぞ。そして何にも饒舌つちや可かないせ」と彼の耳に囁いた、やがて引き返して御者に向ひ。

「お前が口を出して呉れたので、私は大分助かつたよ」

「そう仰しやつては却て痛み入ります。私は今夜ばかりではございません。度々貴方をお乗せ申しましたが、其都度過分な賃金を戴きました其御恩は決して忘れては居りません。御用がありましたら、何時でも仰しやつて下さいませ」

『難有い』と云つて中野はじつと御車の顔を眺めた。

此御者は蘇克蘭生れで、知識は無いにしても小才は慥かにあるらしい、敏捷で物判りの好い處へ、活潑な米國人に接し、又た其社會状態に觸れたので、夫れが一層鋭くなつたのである。そして日に焼けた澁色の顔の何處かに正直な處が仄見え、人に接するにも仲々叮嚀である。

『も一度今夜頼みたいんだ。お前が他に約束が無くつて、そして能く注意して呉れば……』

此最後の言葉で、少し責任が重くなつたやうに感じて、御者は稍躊躇の氣味があつたが。

『屹度注意を致します。私は酒を飲んで目がくるく舞をするやうな時でも、馬を使ふことだけは誰にも敗を取らぬ積りでございます』

『成程、それで解つた、お前は先刻酒を呑んで居たのだねエ。今夜は暫く酒を呑むの

を辛抱して、之れから一骨折つて貰ひたいんだ、濟んだら私の取つて置いたシャンパンを驕るよ』と云つて中野は笑ひながらも机の前に行つて、抽出から紙幣を二枚出して之を御車に渡した。紙幣は十弗のが二枚であつた。御者は嬉しさに目が踊るやうである。

『之れは誠に痛み入ります、では、無遠慮に頂戴致しますと、幾度も押し戴いて四つに畳み、ズボンのポケットに深く押し込んで、上から一寸撫で、見た。斯くて御者は扉を開けて出かけたが、中野は彼を見送りながら。』

『では表で待て居て呉れ、私が出て行くかも知れず、事に依つたら、人を送つて貰はうかとも思つて居るのだ。では頼むよ』と御者を出し遣り、扉を内から堅く締めた。

中野は暫く室の中央に立つて思案して居た。彼は少し前にマツチの軸を手にして、自分の今ま居る處に立つて居た女の姿を思ひ浮べて、妙に氣分が重くなるやうに覺えた。心配でもある迷惑なやうでもある、又た今ま其女と顔を合はせるのであると思ふ

と少し恥かしいやうな氣もする。女は恐怖と哀求の切ない感情で震へて居た。房々した銅色の髪の下に輝いて居た其顔の愛らしく、いぢらしかつたことを思ひ出さずには居られぬ。小供が悪夢に驚かされた起き上つた時のやうに、女は中野の目を求めて、歡喜と哀求の情を無言に傳へた。頼る邊なき憐れの者よと彼の耳元に囁くやうに感ずるのであるが、不思議に女に會ふのが、怖いやうにもある。何と思つても次の間の敷居を跨げる勇氣が出ない。女と向き合つたら、自分の偽りなき心の底を語らずには居られないが、其語らふ相手は罪に汚れて、社會に顔を向けることの出来ない盜賊である。其結果は今から充分豫想することが出来る。中野は既に社會の表面に生活し活動して居るから、社會の批判の如何に峻酷なるかは能く知つて居る。彼が爲さんとする處行に對して社會は屹度容赦なく批難するに違いない。併し自分の生命は自分のものであるから、夫れを害はうと傷けやうと自分の勝手である。名譽など云ふものも超脱した眼から見ると、存外詰らぬ馬鹿げたものである。社會の制裁に對して辨解すまいと思

へばそれでも濟むのであるから、社會が紳士貴女と云ふ代りに、墮落漢、窃盜と呼んだ處で、別段恐れることはない。最後の審判を経て始めて人間の値打が定まるのであるから、此一時的の假りの批判に對して重きを置く必要はない。

中野は斯く決心して覺えず昂然として肩を聳かし、深く氣息を吸ひ込んだ。全時に彼の眼は希望を以て輝き、次の間との境の敷居際まで行つて。

『お嬢さん』低い聲で叫んだ。自分が斯くまで思つて居る女の名前をまだ確かに知らないものであつたかと氣付いて、彼は再び躊躇したが、既に絃を放れた矢は引き返す由もない。今度は更に明瞭な聲で。

『もう心配はありませんから、どうぞ此方へお越し下さい』と云つたが、何の應答もない。

其時丁度外で馬車のがた／＼走る響がして居たので、或は自分の聲が聞き取られなかつたかも知れぬ、と思つたので一層聲高く。

『どふぞ此方へ』と叫んだが、猶且返答がないので、彼は俄かに心配と恐怖に襲はれ、遠て、前に進み、境の幕を両方に引いた。

十九 終に魔の手に捕る

女は床の間で待つて居る間に、劍の下を潜るよりも尙ほ恐ろしい苦しい思ひをした。神經と身体を過度に使つたものであるから、今にもヒステリーが起りそうになつた。此危機一髪の際に、奇病に襲はれて理性を失ひ、自制的力が無くなつたら、自分の身の破滅は直ちに來るのである、と堅く壁に頭を着けて、有りだけの体力と意志の力を以て、漸く病の發作を防ぎ止めた、此瀬戸を越すと、精神が明瞭になつた代りに、身体は綿のやうになつたので、力なげに身を横へて次の間の様子に耳を傾けた、最初は何を云ひ合つて居るのか、其意味が解らなかつたが、暫く聞いて居た内には大体の筋道が解つて來た。それと全時に自分の身は一層危険になつて來たのではないかと心配

した。中野の注意と保護を受けることが出來なくなりはせぬか、と氣が氣でなかつたが、どふやら中野が警官を説服するらしいので幾分安心した。中野が聽て此處へ遣つて來るに違いないが、其時は直ぐ彼の足許に跪いて、今までの所行を悉皆打ち明けて懺悔し、飽くまで中野の親切なる保護の下に身を托さう、と女は思つた。彼女は斯くまでに中野の愛護を力にして居るのであつた。中野が兇賊を逃がしたは全く自分を助ける考へからである、と女は明かに覺つた、否な、唯々相川の毒手から救ひ出し、繩目の恥辱を豫防して呉れる計りでなく、自分の今の恥づべき位地から援け上げる積りなのであると思つた、相川を逃がしてしまへば、警察を恐るゝ理由もなくなる。其處で此家から連れ出して、安全の場所に戻したら、女は罪惡に汚れた手を洗つて、元の清淨なる女に立ち返るだらう、と中野は實際思つたのである。

話の模様は又た險惡になつた。中野はどふしても警察へ引つ張られるらしい。没分

曉の警官、非道の警官、汝等は如何なる権利があつて、名譽ある紳士を侮辱するかと
跳り出で、罵つて遣りたい、今にも罵りの聲が喉を突いて出さうなのさ、女は手を握
り締め、齒を喰ひしはつてじつと慄えた。相川や自分は元より罪の重い身体であるが
中野は高潔雪の如き紳士であるから、警官の疑は直ぐに晴れるに違いない。だから、
今中野の潔白を證せんが爲めに、自分の身を犠牲とした處で、中野は夫れを喜ばざ
るのみか、或は却て苦痛に感じ、迷惑に思ふかも知れぬと、道理の上からも怒りを抑
制した。

中野と相川はいかにも能く似て居るから、一寸見間違ふことはあるかも知れぬが、
早や暫く向き合つて談話して居るのに、まだ其間違が解らないとは、世には斯くまで
觀察眼の鈍い、馬鹿な人間があるものかと、女は齒がゆくもあり、不思議にも思ふの
である。相似點は僅かに皮膚の上にあるので、思想、感情、性癖に大なる相違がある
から、是等を通じて表に現はるゝ言語、所作、顔の表情の大なる相違に氣付かない筈

はないのである。自分はどう決して騙されない、一目見て直ぐに見別けが付く。何と
云ふ愚かな警官達であるかと、獨りで殘念がつて居る。
中野は今ま昨夜以來の出來事を語つて居る。彼が女に關したことを少しも語らず、
努めて隠さうとして居るのを知つて、女は嬉しさが胸にこみ上げて、泣きたくて堪ら
ないのであるが、假令後で足る程泣いても今は些の聲も出されない。警官に氣付かれ
たら最後、自分の運命は夫れで定まるのである、と唇を噛みしめて耐へた。
何故警官は中野を疑ふのであらう。實に馬鹿な人達である、あれで能く職務が勤ま
つたものもあると、女は又もや怒りに心が狂ひ出したが、此時探偵平田の聲で。
『お前は無論寶玉を手に入れただらうが、全体何處へ置いてあるのだ』と云ふのを聞
いて女は冷りとした。

之に對する中野の答を聞いて更に女は恐れた。警官が飽くまで中野を相川であると
疑ひ、中野が又た飽くまで警官に反抗したら、順序として先づ此家を搜索するに違ひ

ない。其結果自分の此處に居ることが知れたら何うなるか。中野には既に容易ならぬ心配をかけて居るから、此上迷惑をかけることは何としても出来ない。自分は何うあつても此處を逃げ出さねばならぬ。そして何處か距つた處から今夜直ぐに、それが出来なかつたら早朝に、電話で寶玉の隠し場所を知らせ、又中野の好意に背いて逃げ出した譯を辨解しても構はない。

斯く考へて居る處へ佐助が小包を以て上つて來た。そして其小包ががさ／＼と廊下の壁に觸つた音を聞いて、女は不圖脱走の手段を思ひ付いた。と、全時に廊下へ向ひて開いた入口まで歩み寄つて、暫く其處で考へて居たが自分の思ひ附いた手段は假令危険であつても、決して實行の出来ないことはない。と決心して、廊下へ一步踏み出した。下から人が上つて來たら大變であるが、素早く引き返して元の室へ戻れば好いのである、警官等は今中野と言ひ争つて居る最中であるから、他の事に注意を向けては居ない。又書齋の入口は三分の二ほど幕が引から、残る三分の一は御車の廣い肩

に遮られて居るから、廊下には殆ど内の光明が來ない。

女はまだ爪先で立つたまゝ少し逡巡して居たが、佐助ががさ／＼と小包を開きかけたので、其音で自分の動作につれて起る微かな響を紛らすに好くは無いと、勇氣を出して二秒間、階段際まで進み、やがて一氣に七八段降りた。階段は其處から折れて、今度は真直ぐに玄關まで降りられるのであるが、女は再び躊躇した。今まで何とも氣附かなかつたのであるが、階下に人が一人も居らぬ筈はない。恁んな際であるから或は巡查が表に立番して居るかも知れない。玄關へ降りても出ることが出来なければ仕方がない、と當惑したが、永く考へて居る餘裕は元よりない。元の部屋に歸るか、夫れとも階段の上り際の廊下の隅に隠れるか、二者其一を撰ぶ外はない。上り口の隅の壁根には藪こそ澤山溜つて居るかも知れぬが、何處からも光明が來ず、人の來ること

は斷じてない。女は此處へ身を隠す方が寧ろ安全であると思つた。

今ま女の立つて居る處には、瓦斯燈はあるのであるが、早や宵から消してあるらし

い、唯立關の光明と上の書齋の光明の間接の間接に來る計りであるから、殆ど黒闇も全じである。足音さへ立てねば少しの危険もない。女は漸くに登り盡して晝さへ光線の届かぬやうな隅に身を潜ませた。女は此時不圖小供らしい恐怖を感じ出した。妖怪や變化の物語を思ひ出して恐ろしくて堪らない、と云つて逃げ出す譯にはゆかず、聲を立て泣く事も無論出来ない。全く迷信から起る心の迷であると打ち消して見ても、恐怖の念は仲々去らない。處が俄かにどやくと廊下を歩く人の足音がする。中野が別れの挨拶をする聲も聞えるので、一時心丈夫に思つたが、直ぐ元の通り森閑として來たので、恐怖は再び襲ふて來た。やがて書齋の戸が開いて人の足音がしたと思つたら懐かしい中野の聲がした。

『それでは表で待つて居て呉れ、私が出て行くかも知れず、事に依つたら人を送つて貰ふかも知れぬ』

中野は自分が逃がす用意をして居るのである。何と云ふ同情のある行き届いた人で

あるう。何うして此親切に報ひ盡す事が出来やう。自分の身体と生命と總てのものを投げ出して足らないと、眞底から中野の好意を謝した。女は直ぐにも風んで行つて馬車を借りたやうに思つたが、まだ其機會は來ないと逸る心を制した。夫れと全時に中野は果して自分の爲めに馬車を用意して呉れたのであらうか、と少し疑ひ始めた。人の心はそう容易く讀めるものではない。中野は自分を何う思つて居るか、また何うしやうと思つて居るか。單に想像して見るまでのもので、明確には解らないのである。或は疑の眼、輕蔑の眼を以て自分を見て居るかも知れぬ。夫れも無理からぬことで、疑ひ且つ卑しむべき理由が充分にあるのである。自分は之に對して何と言ひ解かうやうもないのである併し中野が今まで自分を遇した態度から見れば、矢張自分の爲めに用意した馬車に違いない、一言の禮も云はずして此好意を受けるのは、何だか良心が咎められるやうであるが、後で手紙を以て謝しても自分の眞心の届く譯である、と逃走の決心を固めた。御車は今しがた降りたから、中野の氣附かぬ間に早く

逃げねが、と隠れ場所から忍び出でた。階段には厚い毛氈を敷いてあるから、爪先を立てて些の音もさせずに、到頭最終の一段まで降りたが、御車が降りると直ぐに行つては、或は疑を受けるかも知れない、と思つたから欄杆に凭れて、時の移るを待つて居た。此時女は一種不可思議の衝動から、覺えず二階の方を見上げたが、誰か人が降りて来るやうである。中野であらうか、否や、そんな筈はない。併し孰れにしても最早一秒の躊躇も出来ない、と思つたので女は急ぎ扉を開いて外に出た。御者は早や御車臺に乗つて待つて居る。女は石段を降りながら。

『早く！、頼むから直ぐにやつてお呉れ』と叫び急いで馬車に乗つた。御車は中野の命令を受け、其爲めに過分の前金を貰つて居るのであるから、乗手が婦人であらうが誰であらうか、お構はない。いきなり手繩を引き絞つて、將に馬に鞭を與へやうとした其一刹那に。

『御者！、一寸待て！』と誰か叫んだ。

御者は手を止めて振り返つて見たが、疑もなくほんの今二階で別れた中野である。

其中野は早くも馬車の足臺に片足掛けて御車を見上げ。

『私も一緒に行くことにした、聖保羅館まで急いでやつて呉れ』

『承知致しました』と云ふが早いた御車は馬の横腹にしたゝが鞭を加へたので、馬車は第五街の方へ全速力で走り出した。女は今這入つて來た男を無言の儘に見詰め、隅の方に身を縮めて震へて居る。

女が階段の上り口の隅で隠れて居た時、不思議に恐怖を感じたのは全く此男の所爲であつた。目の前に其恐ろしい姿は見えなくとも、女の頭の底に深く喰ひ込んで居るので、夫れが暗鬼となつて現はれ、絶えず恐らかすのであつた。そして再びその悪魔の手に捕へられたのである。女は恐怖の爲めに全く思慮を失ひ、唯だ逃げたい逃げたいと云ふ本能的の衝動から、大膽にも街路に飛び降りやうとしたが、早くも男の手は女の腕を掴み、手荒く引き戻して女を座席に壓へつけた。

『こん畜生！、静かにしろ！、三度も逃げられて堪るものか、埒を明けるまでは一寸も動かしゃしない。若し少しでも叫ばうものなら、直ぐ締め殺すから其積りで居れと毒々しく叱りつけた。』

二十 兇賊摩天樓に巢窟を構ふ

女は馬車の座席のクシヨンに恚れたまゝ黙して一語をも發せない。兇賊相川は女の様子をじつと見て居たが、聽て嘲笑つて。

『中野の奴は見かけ程に馬鹿でもないらしい。最初彼奴が俺に容貌が似て居るのを好のことにして、巧く俺の名を騙つたなぞは仲々喰へない處がある。彼奴の智慧を學んだと云ふじやないが、俺も一時彼奴に成り濟まして到頭警察の網を潜つてやつた。今また馬車まで用意して逃がして呉れるなんて何處までもぬからぬ奴だ！、これがなかつたら何うすることも出来なかつたんだ。實の處道の俺様も途方に暮れて居たんだ。』

何うしてお前さんを連れ出さうかと思つて。中野の奴には俺も大分厄介になつた。まあ、お蔭で恚うしてお前さんを手に入れたから一寸一安心だ』と女を尻目にかけて『お前さんも仲々巧くやるよ、チャンと馬車に乗つて待つてて呉れるんだからねエ、フム』と何處までも皮肉で女に調弄つたが、女は首垂れたまゝ矢つ張黙して居る。大分気分は落付いて來たが、それでも逃げたい、叫びたいと云ふ本能の衝動を絶えず感じた。併し最早虎の口を免れる手段は無いのであるから、暫く機會の來るのを待つて居る外はない。だが、何時まで心の張が堪え得るかは自分にも解らないのである。『私に何んな御用がおありなさるのですか』と女は漸つとの事で始めて口を開いた。『用が無くつて連れ出すものか』と相川は嘲笑た。『其御用を云つて戴けないでせうか』

『女貴も大抵解りそうなもんだ。兎に角今は云びますまい』
『相川さん』と女は努めて氣輕に云つた。

「何ですと」相川は冷かに女を見詰めた。

「私しお願があるのですが……」

「お願！、貴女、今更そんな事が云える身分ですか。私を誰だと思つて居るのです。中野とは違ひますよ。今迄随分貴女には馬鹿にされたから、何ぼお人好の私も辛抱がしきれなくなつたんだ。貴女も私も全じ道を行く一種の片輪者ですが、併し私には脊骨があります。自分の職業に就いて充分の自信もある、人もたてゝ呉れてるのです。十二ヶ國の警察が鵜の目鷹の目で尋ねて居るのですよ。一度捕縛されたら、生涯明るみへ出られないのです。貴女と中野のお蔭で今日も二度危く捕へられる處でした。斯うなつたら糞度胸を据える外はないんだ。解つたでせう」

「いゝえ、解りません」

「では、解るやうに話しませう。今夜私は裏庭へ降り垣を越えて逃げやうと思つたのですが、少し考があつたから、非常口から最上階まで登りました。一寸誰も思ひ付き

ませんねエ。つまり最上階から階段を傳つて直ぐに玄關へ降りたのです。何故でせう中野が私を逃がして置いて、後で貴女と長椅子のいちやつきをやる積りに違いないと睨んだから、其裏をかいて鼻を明かけてやらうと思つたからです。私はまだ懸引や策略で人に敗けたことは無いのです。まだ巡査でも探偵でも怒つて私に手を出したことは無いのです。魚心あれば水心ありで、毎時彼等を満足させるのです」と相川は得意になつて話した。

女は兇賊が何處まで恐ろしい奸計を持つて居るか解らないと思つたので、再びヒステリーが起りそうになつたが、漸く之を防ぎ止めて氣力を取り直し。

「貴方は若し私か此處で大聲に叫んで、救を求めたら、何うなさるお積りです」と相川の心を搜つて見た。

此時馬軍は最も繁革な廣道通を走つて居たので、自働車や馬車の往來もまた絶えて居ない。相川は女の間に答へたが、街路の喧噪に妨げられて、駈に聞えなかつたやう

であつたから、更に意味を強めて之を縁返し。

『まあ一つ叫んで御覧なさいそうしたら私が何うするか直ぐ解ります』と云つたが、女は頓に答へやうともせないのので更に言葉を繼ぎ『併し貴女はそんな馬鹿な真似はしませんまい。墓場の中を探検したつて別に面白くもないでせうから。そして貴女は能く知つて居る筈ですがねエ』

『何をです』

相川は拱いた腕を解いて、右手を上衣の下に入れて。

『貴女は私のピストルを一挺取つた計りですよ。解りましたか』と云つて氣味よげに冷笑を以て女を見遣り『一聲でも發したら、それが貴女の最後ですよ。一度捕へられたら私の運命は夫れで盡きるので、生きて居ながら死んだも全じですから、手つ取り早く私も貴女のお伴をします』

『では、あ、貴方は私をこ、殺す積りなのですねエ』

『どうです、犬を殺すやうに』

『あ、貴方が？、男が女を殺す？』

『貴女は女じやないです、泥棒です。私も男じやないのです、お互に性もなければ精神も無いのです。まして抹香嗅い慈悲心なんかがあるものです。貴女はそれが今まで解らなかつたのですか。兎角素人は貴女のやうな考へ違ひをするものです。今夜も共同したら何うですか、と穩當の相談を持ちかけたのですが、貴女は餘つ程傲慢な方と見えて、之に應じないのですからねエ。今夜は少し異つた趣向を見せてあげます』
相川は威嚇する積りか、夫れとも本氣に殺す積りか、女は今夫れを考へてゐる餘裕が無い。只厭な恐ろしい蛇にでも見入られたかのやうに、身震して隅の方に避けた相川は益々毒相を現はし、横目で女を睨へながら。

『まだ他にも貴女に教えてあげることがある。若し貴女が聲を立て、我々二人が捕へられたとしたら、貴女の名前は勿論、我々三人に關した事件は悉く新聞に素破抜か

れるでせう。中野は屹度貴女を怨むに違いないです。殿様相川が女賊と共に廣道通で繩にかゝつた、此女賊はどうやら中野丹次郎と關係があるらしい。と云つたら讀者は定めし驚くだらうが。氏は物數奇にも高峰の花ならぬ、泥中の蓮……であるや否やは疑問であるが……に思を焦し、窃つと手折つて塗れた泥を洗ひ落し、手生の花として之を眺め飽かさうと思つたのである、と大業に書き立てた新聞を見たら、中野は大方飛び上つて喜ぶでせうよ。へへ。何うです、人殺し！、と一つやつて見ては？、だが貴女はそんな馬鹿じゃない。おとなしくて私に従ひて來るでせう？」

女は餘りの悔しさ恐ろしさに、氣抜けしたやうになつて啞黙つてゐる。相川は更に言葉鋭く。

『従いて來ますか』と尋ねたので、其顔と共に殆ど血の氣を失ひ恐ろしい程蒼白になつた女の唇は幽かに動いた。聲は發せなかつたが、明に承諾の意を表したのである。相川は尙ほ何か呟いてゐたが、兎に角女には早や逆ふ氣力が無いと思つて満足してゐる。

らしい。体力も心力も過度の使用からして既に疲れ切つてゐるから、何んな條件を持ち出して、女は必ず聽き入れるだらうと思つて、内心竊かに成效を期して喜んでゐる。

馬車が電車の線路を横切つて四つ角で忽然止まると、相川は直ぐに歩道に飛び降りて助け御すべく手を差し出して。

「サアお出でなさい。愚圖ついてゐる暇は無いのですからねエ」

相川の顔には抵抗しやうとする氣色が少しもちらついてゐたが、相川の鋭い眼と堅き決心を示せる態度に避易して、直ぐまた喪心したやうになつた。

「お降りなさい」と相川が再び叫んだので、女は震えながら手を差し伸べ、歩道に助け降されて、兎も角相川と肩を並べて立つた。相川は御車を顧みて。

「待つてゐなくとも好いんだよ」と云つて女の手を脇の下に取つて歩み出した。

「もう諦めがついたでせう？、おとなしくするのですよ」と相川は女を誡め、意味あ

りげに胸の内側のポケットに一寸手を入れた。

『解つてゐます』と女は細い聲で云つて口を堅く噤んだ。

二三十足歩いたと思つたら、早や廣道通の最高摩天樓の表口へ這入つてゐる。其處は待合所で、中は大理石板で敷き詰めてあるから、足音が高大なる建物の内部に反響して妙に聞える。此等の石板は日出から今まで早や幾萬の人に踏みつけられたか解らない。摩天樓と云へば只一個の建物のやうに思はれる、また夫れに違ひないのであるが、其中には幾百の會社や事務所があるので、宛然日本の都會の一町内若くは一區劃のやうである、日本の都市は次第に其近郊に向つて平面的に伸びて行くが、紐育市は上へ上へと垂直的に伸びて行つて、終に此等の大摩天樓となつたのである。

二人は汚れた黄色の布を被せた新聞や煙草の店臺の前を通つて、昇降機の下下する大シャフトの傍まで進んで行つた。毎時は六個の昇降機が絶えず上下してゐるのであるが、今は只一個だけ運動の用意が出来てゐる、他の五個は晝間の激しい働に疲れ

つて寝てゐるかのやうに全く静止してゐる。二人が其前で立ち止まると、今まで首がコクリ／＼として居眠してゐた夜番は驚いて立ち上り、其拍子に懸けてゐた椅子がガタンと尻餅を搗いた。彼は目をこすりながら大欠伸をして、聽て其手を下すと全時に相川に向いて一寸頭を下げて。相川は頗る横柄に。

『小幡さんはゐるだらうねエ』

夜番は大方眠氣を拂ひ去つたと見えて、其殊に大きな目で相川と其連れの女を眺めた、女は相川の腕にすがつて身を縮め、ガタ／＼と震えてゐる。餘程物に恐れてゐる容子で、今にも腦貧血を起して其處へ倒れはしないかと氣遣はれた。夜番は豫て中野を見知つてゐると見えて。

「貴方は中野様で？、小幡さんは多分事務所にゐられるだらうと思ひますが、併しお受合は出来ません」

『二時に會見する筈になつてゐるのだから萬一外出してゐても直ぐに歸つて來るだらう』

う。非常に重大な用談があるのだから。何うだらう？」

「何とも私では……今夜はまだお出ましにならない様にも思ひますが、兎に角御條内
しませう」と云つた拍子に不審げに娘を眺めた。

「此お方には大變な心配事があるので。恚んなに夜更けて態々連れ立つて來たのだが
小幡君がゐないと一寸困るねエ」と云つて、膺中野は自分の脇から胸の邊に取つた女
の指の上に手を載せて、勞はるやうにした。

「兎に角案内して貰はう。若しゐなかつたら電話で呼び戻しても遅くはない」と相川
は漸く決心をした。夜番は中野の地位と名望を知り、今ま目の前にゐる相川を中野で
あると信じてゐるので。

「承知致しました。どふぞお這入り下さい」と叮嚀に云つて、昇降機の潜り戸を開け
た。女は最後の抵抗を試みやうとしたが、中野が眉に皺を寄せて「こら！、此ビスト
ルが解らないか」と云はぬ計りに自分の胸に持つゐる、女の手を當てたので、兎も角

も鋼鐵製の籠に從いて這入つた。戸はガタンと締つた。昇降機が次第に速力を増して
來ると、女は眩暈を感じたので、相川の腕にすがりながらよろ／＼と倒れかけたが、
極めて狭い籠であるから直ぐ其壁に依つて支えられた。相川は之を心地好げに眺めて
ゐた。

昇降機の速力が減じて來たので女は少し力つき漸く目を見開いた。第何階と黒い地
に白文字で書いたのが下へ／＼と走つて行く。第十九階と云ふ文字を始めて讀み得た
から、大分速力が減じて來たと思つてゐると、間もなく第廿二階と書いてある處で昇
降機が止つた。夜番は戸を開けながら。

「道はお分りでございますか」

「大丈夫、二段上の塔だ」

「左様でございます。では、若し御用がありましたらどふか呼鈴を……と」頭を下げ
二人を廊下に送り出して夜番が元の籠に戻るが早いか籠は矢のやうに降りて行つた。

二十一 美人兇賊に従はず

女は兇賊と共に地上幾百尺の最上階に残された。四面は闇として此の物音も聞えず長い廊下の両端の窓から間接に淡い月光が這入つて来るのみであるから、眞の黒闇も全じであるが、相川は能く勝手を知つてゐると見えて。

『サアお出でなさい』と荒々しく女の手を引つ張つた。

女は今日一日過度に神経を悩まし、屏弱い身体を容赦なく虐使したのであるから、今は身神の活動能力を全く失ひ、受動的に相川猛悪なる意志の暗示のまゝに動くのである。こんな精神状態に在るのだから、女は相川の導くまゝに、足を引き摺るやうにして、二層の階段を登つて行つた。其處は即ち屋根で、此屋根の上に二階の塔が突つ立つてゐる、最上階の上に更に塔を建てたのは、別段必要があるからではない。只此界限で最高摩天樓であると云ふ名聲を博したいのと、幾分建築美を増すからである。

表の階段を登つて行くと、突き當りに扉があつて、其硝子が外の月光を間接に受けてざら／＼してゐる。相川は女を横に突き退け、ポケットを搜つて鍵の輪を取り出した。それをジャラ／＼させて呟きながら扉の錠前を弄つてゐたが、すぐキチツと音がして扉は開いた。相川は内に這入つて玄關の内側の壁に取り付けたスヰッチを捻つた内は電燈の眩しい光で明かに照らされた。

『サア、お這入なさい』と相川は女を案内した。

女が這入つたのは家具装飾の奇麗に整つた、小ぢんまりした室であつたが、まだ奥にも一間あるらしい。俄かに電氣燈の光に打たれて目が少し眩ゆかつたので、女は入口から二三歩進んだまゝ立ち止つてゐたが、相川は女が這入ると直ぐ扉を締めて内側の掛金を卸した。聽て相川は言葉は無用であると云ふ風に、黙つて女の腕を捉へて、奥の間に引き入れて手を放した。そして電燈を明し、窓際へ行つて三つ程窓を開けた室内の空氣が塞つて異様の臭氣があつたからである。

「先づ之でよしと。之から一つ緩つくりお話を聞かませう」と云ひながら、相川はコートと帽子を脱いで手近の椅子に投げ懸け、右の手を腮に當て、立ちながら唇邊に冷笑を浮べ、心地よげに女の顔を眺めた。

女は執意もなく、好意をも感ぜない人のやうに、元の場所に立つてゐる。腕を両脇にだらんと垂らして少し上体を横に傾け。顔にも眼にも早や生氣が無いやうである。今にも喪神して倒れそうである。まだ女の口から少しも事實を告白させぬ内に死なれては大變である。是かる拷問して女の胸の秘密を發くまでは生かして置く必要があると相川は毛ほどの慈悲心はないが、全く自分の利益から打算して、女を抱いて窓際の革椅子に座せしめ、次の間に行つて水を満たしたコップを持つて來た。女は外から來る冷たい風で少し氣分が好くなつたと見えて、クシヨンに首を恁たせかけ。氣力を附ける爲めに努めて冷たい空氣を深く吸ひ込んだ。水を呑んでは一層氣分が引き立つたと見えて、小さいハンカチをコップの水に浸し、それを顛顛に當てがつた。此間相

川はじつと女の容子を眺めてゐた。

女はこれから自分の身が何うなるか云ふことを知りもせねば、知りたいたとも思はないが、避くべからざる最後の運命を出來得る限り延ばしたいと云ふ本能の衝動からして、正氣がついてからも態と喪神の状態を装ひ、亂れた髪を掻き上げやうともせず、首を臥せた儘窓から無心に空を眺めてゐる。併し女の頬には早や薄すらと紅が潮してゐるので、相川はもう大丈夫と思つたか、はきくした鋭い口調で話し掛けた。

「もうぼつ／＼始めても構はないでせう。何うですか加減は……」

「ハイ」と女はほつれ毛を掻き上げながら微かに口を開いた。

「ではもうお加減は好いのですねエこう愚圖つかれると或は私の身の破滅が來るかも知れないのですが、私は紳士泥棒と云はれる男ですからねエ、面目を重んずる上から云つても、普通の泥棒の遣る様な見苦しいことはしたくないです。充分貴方に餘裕を與へて男らしく切り出すのです」と云つて微笑した。其態度がいかにも沈着冷靜で、

女に最後の宣告を與へることを少しも恐れてゐないやうである。彼は机の上に尻を卸して女をぎろく見下し。

「此處まで連れて來た以上は、安全なもので、お互の戦争に干渉や仲裁の這入る氣遣は少しも無いのです、あの夜番の外には恐らく生きた人間は一匹もゐまいし、其窓の下は廣道通だが、お氣の毒ながら夫れが幾百尺の下方にあるのだし、入口は私が塞いでゐる。だから避くべからざる運命と諦めて、私が許すまで此處で緩くりしておいでなさい。助けを呼んでも勿論聽いて呉れるものは一人も無いのですからねエ」

「宜しうございます」と女は無心に答へ、毛虫にでも觸れたやうに身震をして顔を背け「で、何んな御用がおありなさるのです」

「寶玉だ！、疾くに解りそうなもんだ」

「解つてゐました」

「それならそうと早く云へば、要らぬ言葉を費さなくとも濟んだのだ。じゃ之から尋

常に私の尋問に答へるのですよ」と相川の語調はそろ／＼怒を帯びて來た。女が首を横に振つたので、相川の言葉は更に荒々しくなり、漸く悪徒の殘忍性が現はれかけた。

「不承知と云ふのだナ。非常手段を取つても構はないですが。まさか構はないとは云ひますまい、餘り好い氣持はしませんからねエ。兎に角眞つ正直に事實を告白するまでは斷じて承知せないんだ」

女は何とも答へない。沈黙が唯一屈強の武器であると覺つて、女は努めて冷靜沈着に構へた。相川の胴喝に氣怯して、つい無分別な問をしかねないから、女は出來得るだけ氣分を落ち着けて沈着不動の態度を取らなければならぬ。

「今日の午後貴方は中野の寶玉を私の手から騙り取つたでせう。彼れを何處へやりました」と嚴しく尋ねた。

「それが容易く云へる位なら此處まで貴方に従いては來ません、何と仰しやつても何

んなにされても此事計りは云はれません』

相川の顔には見る／＼青筋が浮んだ。そして直ぐに女の手を捕へたが、女は無意識に其取られた手を結んだ。相川は其白い小さい手を大きな廣ひ掌で包み、食指を折つて其第二關節を女の指の骨に當て、徐々に壓迫を加へた。彼は女の顔に現はるゝ苦痛の表情を冷淡に眺めて居た。苦痛の度が加はるに従つて、女の額からだら／＼と冷汗が流れ、其顔は次第に青褪めて來た。相川は懸て女の手は依然とし握りながら突然壓迫を中止し。

『苦しいでせう？、言ひますか、夫れともまだ足りませんか』

『決して言ひません』

『寶玉は何處にあるのです』

『……』

『中野に返して遣つたのですか』

『否え』

『何處にあるのです』

『知りません』

『呆けちや可けない、何處にあるんだ』

『……』

『言へ！』

『決して』

相川は怒氣滿面に溢れ、再び苛責を始めやうとしたが、突然表の戸を叩く音が聞えたので、彼は残念さうに手を振り放し、立ち上りさまに胸のポケットからビストルを出し、女を一寸見向いて室を出で、扉をビシヤリと閉めた。

女は相川が出るとしく／＼泣き出した、苦痛と口惜しさの涙がポロ／＼と頬を傳つて、膝の上に零れて居たが、而も唇は固く閉ぢて、鐵の如き強い決心が表はれて居た。

女は今この苛責に氣も狂はしくなつたが、つと立ち上つて室内をぎろ／＼見廻した。彼女は此上の苛責拷問には堪へ得ないと思つたから、防禦の楯でも、攻撃の武器でも構はない、何か代用する適當なものはないか、と探し求めて居るのである。目に觸るものは、三個の腕椅子と、回轉椅子と、斜面机と、平面机と室の中央に置かれた大テーブル計りで格別防禦の用にはならない。攻撃の道具としては一本の細いステッキがあるが、之れとても力と頼むことは出来ない、不圖目に留つたのは平面机の上の電話機である。が、若し外から話を聞き取られては之れも用をなさぬ、併し二重の扉があるからよもや外に漏れる氣遣はあるまいと、思つて居ると、恰も其反對の證據を示すかのやうに表の戸の蝶鉸の軋る音がして、廳で怒氣と恐怖の調子を帯びた男の聲が明瞭に聞た。

「馬鹿な！、見す／＼お互の滅亡を招くんだ、何と思つて……」と云ひかけた時にガタンと戸が締つたので語尾は少しも聽えなかつた。

「登りがけにあの夜番が呼び止めて、君が僕に電話をかけると云つてたと注意したもんだからねエ」と新來者は悲しな語調で辨解した。

「馬鹿な奴だ、要らざる干渉だ」と相川はぶり／＼怒つて居る。

「君は何でそう怒るんだ、全体女が怎うしたと云ふんだ、全体狂氣染てるじやないか」と新來者の聲も少し荒くなつた。

「そう大きな聲をしちや困る」と相川は云つたが、不圖自分の聲も高かつたことに氣が附いて、自分も聲の調子を低め、二人は暫くひそ／＼と何か相談して居るやうであつたが、何を云つて居るのか勿論内へは少しも聞えなかつた。

女は二人が聲を低める少し前から、電話機に寄りかゝつて居た。女の叫んだ中央局の九千九十八番は中野の家の電話番号である。若し中野を呼び出すことが出来たら、寶玉の隠し場所を知らせて、早く他に移すやうにと注意する積りなのである。そして相川に事實を告白しても構はず、此上の共責を免れることも出来ると思つたのであ

る。

「何番？、九〇九八ですつて？」と暫くしてから交換手はだらけた句調で訊ねた。

「そうです、九〇九八、中央局ですよ、どふぞ早く」と女は苛々して居るのであるが仲々相手が出て来ないので再び交換手を促した。

「呼んで居るのですけれど、出て来ないので……あア、繋げました、お話なさい」

『モシ〜』

「お前さんは誰だア」と云ふのは慥かに佐助の聲である、彼の男が出て来た處を見ると、或は中野は外出して居るのではないか、と思つたので、女の顔は失望の色に曇つた。

「佐助さんでせう、旦那を早く呼んで下さい」

「旦那は留守でござえます」

「では、旦那にそう云つて下さい」

「何ちう合點の悪い、旦那は留守じやと云ふのに。明日の朝にしなされ」

「併し直ぐ旦那に言つて遣ることは出来ませう。お頼みですから……」と云つて之から肝心な用向を云はうと思つて居る處へ、扉が突然開いて、相川が眞蒼な顔をして飛んで這入つて来た。女は驚いて机を飛び退き、卓上電話機を手に持ちながら、片手で回轉椅子を取つて相川の前に投げ付け。

「どふぞ眞鍮の椀と夫れだけ旦那に云つて下さい」と明瞭に送話した。

相川は烈火の如く怒つて女に飛び蒐り、其持てる電話器を叩き落とし、其細い腕を攫んで二三度振り廻した。女が斜面机の角を捉へて危く身を支えた時、相川は電話機を拾ひ上げた。

「モシ〜貴方は誰です」と送話口で叫んだ、其答は勿論解らないが、不思議に相川の眉根の皺は忽ち消え、全時に怒も和らぎ、微笑さへも浮べて居る。

女は相川が自分の秘密を解き得たのでは無いか、とハツと思つて覺えず身震をした

女は僅か一語で複雑した全体の意義を覺られるやうなことは無からうと思つたのであつた。若し相川が寶玉の隠し場所を知つたとしたら、女の今迄の苦心は全く水泡に歸したのである。千悔千悟しても最早取り返しはつかないのである。

相川が鈎に電話機を懸けて、電話器を机の上に置き直ほすと殆ど全時に、イヴニング、コートを着た、背の低い頑丈な體の男が遽しく這入つて來た。彼は何故か非常に激して居るやうす、其血走つた眼で女を憎さげに一寸見やつて、相川の腕を攫み。

「相川君、怎うしたく、え」と

「もう安心だ、君心配しなくても好いよ、少し落着いて其處へ懸け給へ」と相川は靜かに答へて聽て呵々と笑つた。

「併し、ど、ど、何うなつたんだ」と新來者は吃つた。

「此女が今ま電話をかけて居たんだ。仲に女でも落着いたものさ」と微笑し「眞鍮の腕と云つただけでは解るまいと思つて、僕の居る前で送話器で叫んだのだ。此處らが

矢つ張女の淺智恵だねエ、僕は中野の机の上に眞鍮の腕を伏せてあることをチャンと知つて居るんだ。それから電話機を引つたくつて、誰だと訊いたら例の佐助の阿房がお前さんは誰だアと來るだらう」

「アム、それから」

「つまり僕を騙つて取つた寶玉を、中野に戻してやらうと思つて窃つと其眞鍮の腕の下に隠したんだ、僕に嗅ぎ付かれないやうにさ」と云つて女の方に向き「お前さんはほんとに喰へない代物だよ、併し此相川にかゝつては、道かのお前さんも降參だらう」と云つて相川は帽子と外套を引き寄せた。

「それで君は之から何うする積りなんだ」

「何うする？」と輕蔑したやうな口調で云つて相川は言葉をつぎ「取つて來る外はないぢやないか。幾度も無駄骨を折つて、おまけに危く玉を逃がしてしまふ處だつたが其玉の在所が解つた以上、もう寸時の猶豫は出來ない。夫れに警察は愈よ本氣で活動

し出したから、手つ取り早く片付けねば險呑だよ』

『それで僕は？』

『君の行く必要はないよ、行つた處で分け前は全じことだから』

『併し若し中野が……』

『留守なんだ、佐助がそう云つた。君は合點の悪い男だね』

『併し歸つて來るかも知れないよ』

『そりや御勝手だ。お氣の毒だがこれじや』と云つて相川は上衣の裏を返して、ポケットの中から少し覗いたピストルを示し『僕は中野と他にも關係があるのだから』と云つて意味ありげにテーブルの傍に腰を懸けて俛いて居る女を見やり『僕は寧ろ其方が好いんだ。殺してしまつた方が』

『それでは僕は餘り手持無沙汰だが……』

『構はないよ。だが、此處で此危険な女を看視して貰はうか、若しか警察本部へ電話

をかけるかも知れないから……併し待てよ、一層此機械を駄目にしてやらうか』と云つて、相川はポケットから螺旋技を取り出し、机の前に座して電話機の要處々々の螺旋を抜きながら『小幡君、慾を云へば矢つ張君が中野の家まで一緒に來て呉れた方が好いね』若し踏み込むのが怖かつたら、何處が附近で待つて、呉れよば好いんだ。僕は寶玉が手に入つたら直ぐ一緒になるよ。そして一番遠方へ行く一番列車で逃げることにしよう。併しお互に可なりな仕事は行つたね』君は社交上の地信信用を利用して寶玉の所在を突き止める、僕は勇氣と熟練を以て夫れを捲き上げる、利得半分分け。丁度車の両輪、鳥の両翼と云ふ調子で大分巧く行つたが、何時までも此調子の續かないことはお互に覺悟して居たんだ。併し此儘分れてしまうのは残念だからね』

また何處かで新奇捲き直ほしと出かけるさ。ナニ、其女に氣兼は要らないよ、矢つ張僕等のお仲間だから、只此女が此事件に關係して居ないと云ふこと、そして僕等は勤定的だが此女は馬鹿に感情的なのだ、此二つの點が少し違つて居る計りだ。免に角

僕等の話を他に洩らす氣遣はないんだ。だが、君はもう紐育には居られなくなつたね
 エ、氣の毒だが致方がない。サア行かう、急ては事を仕損じると云ふが、愚圖々々し
 て居ると機會を失つてしまふ、之れで電話の始末は出来たし、朝になつたら知らぬこ
 と、今夜中はこれで大丈夫だ。ではお嬢さん」と云つて立ち上り、外套を腕に掛け、
 帽子を一寸振つて「貴女と知り合になつて格別利益もなし、別段愉快で堪らなかつた
 とも思はれないが、併し一寸面白かつたですねエ、これは私の本心ですよ。ではお別
 れします。朝になつたら掃除婆が來ますから其時戸を開けて出して呉れます、左様な
 ら」

斯くて二人はどや／＼と出て行つた。錠は外からキチツと卸された、女は廿四階の
 樓上に一人残されたのである。苦心と恐怖と苛責と拷問の代價として女は何を得たで
 あらう、何の得る所がないのみか恐らく總てを失つて居る。何物にも代へ難い意中の
 人まで失つた。絶海の無人島にでも流されたやうな淋しさが胸に迫つて來るので、女

は白い細い手でざ／＼と痛む顚顚を押へながら、よろ／＼と立ち上つて、努めて元
 氣をつけやうとしたとして次の間に時計の音がするのが、歩み寄つて其表をすかして
 見た、漸くにして讀み得た時間は二時十分であつた。相川に捉へられてから今まで僅
 か七十分しか経つて居ない。而も女には夫れが一生涯のやうに思はれた、恐らく或人
 の永い生涯の心配と苦痛を集めても、此七十分間の女のそれ程に大ではあるまい。

二十二 終に秘密の鍵を握る

中野はランプを高く差し上げて、廊下から部屋々々を捜したが、女の姿は何處にも
 見えなかつた。彼は甚く失望して書齋に歸り、手にせるランプを机の上に載せた。そ
 して長い指で額を挟み、暫く立つたまゝ考へ込んで居た。彼の顔は少し瘡せたやうに
 思はれる。そして血色も非常に悪い、目には明かに疲勞と苦情が表はれて居る。聽て
 嘆息を洩らして。

『到頭逃げてしまつた!』と呟いて呵々と笑つた。

彼の今ま経験した驚は決して寝耳に水ではなかつた。多少は期待して居たのであるが、餘り好い心持は勿論せない。彼は全体女に餘り多くを望んで居たのである。人間の性は本來善であるから、若し此方から親切を向けたら、屹度それに感應するものである、と信じて居たのである。此馬鹿げた信仰から彼の女に對する態度を定めたのでつまり自分の考が淺薄であつた爲めに、其當然の報を受けたのである、と彼は自分を嘲笑つたのである。

やがて彼は机の前に横様に腰を懸け、机に接した方の手を机の前端に伸ばして、指でゴツ／＼と悲しげな調子を取りながら、今度の出來事の始終を考へた。美しい若い女の心を惹きつける或ものが自分にあると思つたのが抑も間違の本であると、彼は自分の性格を省察したが、一として取り所は無い。氣分計りは豪いが其實愚漢である、小人である。稚氣と銜氣の爲めに過られて、生涯拭ふべからざる屈辱を受けた。彼の

女は屹度腹の中で笑つて居たに違いない。自分の淺薄な知慮をチャンと見透して、女は出來得るだけ自分を利用しやうと思つたのである。何も怪しむことは無い。人のものを掠める爲めに其人の所有物若くは其人自身を利用することは、彼の女に取つて商賣上手として誇るべき理由がある。今朝袂れた時寶玉の分配を請求せなかつたから、いかにも高潔のやうに思つたが、晩に屹度取り返してやると云ふ黒い腹があつたからである、不幸にして相川が邪魔をしたから、女は非常に落膽しただらうが、此點から見ると自分は相川に向つて寧ろ感謝すべき理由がある、と彼は思つた。

中野はまた今夜女が何うして逃げただらうか、と考へ始めた。自分が御者に云つた最後の言葉を盗聞して、窃つと表へ廻る、かの馬車に乗つて逃げたに違いない。自分が技け殻になつた次の間に聲を掛けて居る時、慥かに馬の蹄の音と車の轟がした。御者は喜んで女を迎へたに違いない。女には逃げられる、寶玉は取られる、残つたものは只失望と悔恨と屈辱ばかりであると思ふにつけて、彼は云ひ知れぬ淋しさを感せず

には居られなかつた。

寶玉は彼の母の片身であると思つたら、幾何の金にも換へ難き貴重な寶物であるが母の遺言に依つて種々の裝飾品から皆な取り外し、寶玉計りとして保存してあつたのだから、亡き母の記憶を呼び起すには少し物足らぬ心地がする。若し金と勞力に飽かせたら、寶玉を取り戻すことが或は出来るかも知れぬ。そして夫れを元の通り取り附けて、當主たる彼の花嫁を飾ることが出来ぬでもないが、併し現在彼の胸中に結婚すると云ふ考が果してあるだらうか。恐らく彼は今ま生涯獨身で立てる決心をして居るだらう。

彼は相川と女とが共謀者ではないかと、これまでに多少の疑を挿んで居た。併し若しそうであつたら、女は寶玉が相川の手に在ることを知つて居る筈であるから、二人まで忍び込んで混せ返す必要はない。何を目的に彼等はやつて來たのであらう。或は現金に目をかけて居たのではないかと、疑つて見たが、現金を盗んだ形跡は少し

も無い。併し既に寶玉を手に入れて居るのであるから、金錢以外に目的があつたとは何うしても思へない。それにしても自分が嚴重に警戒して居る筈の今夜忍び込んだのは何故だらう女は相川と一緒に來たのか、それとも別れ々になつて來たのか。疑問は次から次へと起つて來る。中野は複雑煩些に堪へなくなつたから、一切此事を忘れてしまつて暫く續書して氣分を落着け、眠氣がついたら直ぐに就寤するに限ると思つたが、若し再び夜盜に襲來されたら大變であると思つたので、一順戸締を檢めることにした。靴室の窓がまだ開いて居るかも知れない、と不圖氣附いたので、先づ其處へ行つて見たが、果して非常口に通ずる窓が開いて居たので、彼は之を固く閉し、掛金を卸して立ち去らうとした拍子に何か柔かいものを踏んだ。不思議に思つて之を拾ひ上げたら、小さい手提靴であつた。書齋に持つて歸つて能く見ると、どうやら彼の女の手提靴らしいので、中野は甚く驚き。

『ど何うして之が靴室に？、女は靴室で何をして居たのだらう』と覺えず呟いた。

女は相川を追ふて鞆室の窓から逃げたのかも知れぬが、いづれにしても此鞆には女の秘密が潜んで居るに違いない、と彼は再び机に向いて座し、綿密に鞆を検査した、材料は砲銅色の柔かい革で、砲銅の口金に砲銅の鎖が附いて居る、まだ古びては居らぬが、最新の型ではない。一方の側に矢張砲銅でG、Uを組合はせた文字飾が附いてある、或は是れが女の姓名の頭字かも知れぬ。併し之れ以外には別に注目すべき點はない。脆い口金を砕いて開けて見たら、中の秘密は直ちに判明するだらうが中野は斯る手段を以て、人の秘密を發くことを、卑劣の所行として、之を敢てせなかつた。暫く辛抱してある内には女が取りに来るかも知れず、若し來なかつたら新聞で廣告して兎に角女の口からして説明を説く外は無いと彼は決心した、實は彼が斯くまで慎重に考へる程の品物ではないので、其儘火中した處で大きな過失にはならないのであるが彼は不思議に彼の女の手の觸れたものを重大視するやうである。

中野は鞆の處分法を斯く極めて自ら満足し、机の抽出しから古色を帯びたパイプを

取り出し、何か考へく無心に煙草を詰めた。そして机の足でマッチを摺つて之に火を點じ、美味そうに煙を深く吸ひ込んだが、燐寸の燃え残りをまだ手に持つて居る。不圖之に氣附いて彼は灰零しを求めた。彼の眞鍮の灰零しはちやんと机の上に伏せて其上に本を載せてある。彼は不圖又た女の手形を思ひ出した。自分は何故憊んなに意志が薄弱なのであらう、只つた今忘れてしまはうと決心した女を又しても思ひ出すのである、と彼は齒痒ゆく思つた。併し憊うなつてはどふしても開けて見ない譯にはいかない。彼はマッチを捨て、先づ書籍を取り除け、終に眞鍮の碗を取り上げた。彼は驚の叫び聲を發して立ち上つた。その眼は忽ち希望を以て輝き、心臓は烈しく踊り出した、彼は今ま漸くにして悟つた。自分の信じてゐたことの空しからざりしを知つた。が、併し女は永久に彼を去つたのである。女の方から求むれば兎に角、彼れ自身の方ではどふしても女に近くことが出來ない、と覺へた時に彼は非常に落膽した。彼女は中野に對して爲すべきを爲したから心残りはない、と思つて永く別れを告げた

のであらう。女が此夜忍び込んだ譯も自ら明かである。相川が寶玉を持つて居ることを何うして知つたかは解らないが、兎に角非常な危険を冒して相川の手からそれを奪ひ、元の所有主に安全に返したのである。そして相川は執念深く彼の女の後を追つて來たのである。ア、憐れなる女よ、いちらしき鼠の女よ。盗人にも尙ほ一片義理を重んずる觀念のあることを示さんが爲めに、彼女は自分の生命を捨てることさへ辭せないのである。此寶玉を手に入れる爲めに、名状すべからざる危険を冒して居るのである、彼の獯猛なる兇賊相川の盜品を奪るのは、狂獅子の於いて居る子獅子を奪るよりも險呑である。而も彼女は自分の爲めに此危険を冒し呉れた、今一度彼女の女に遭ふことは出來ないだらうか、と中野は悔しがるのであつた。彼の手提鞆の中に索線が無いではないが。彼の女の此立派な行を見ては、意地でも開けることは出來ないから、孰れにしても再會の機は永久に來ないのである。彼の女を乗せて行つた御者に訊いて見たら或は女の行衛が解るかも知れぬ。御者はもうぼつ／＼引き返して來る時分である

から、或は此邊を鳥驚つてゐるかも知れぬ。又た寶玉を此宵此家に置くのは危険であるから何處か確かなホテルの金庫にでも預けねばならぬ。朝になつたら兎も角、今の處では之れ以外に方法はない彼は斯く考へて直ぐに外出の用意をして。忙しげに帽子を被り外套を着て、先づ一方のポケットに寶玉の袋を、他方のポケットに巻煙草入を落し込んだ。そしてまだ二發残つてゐる相川のピストルを其儘胸のポケットに入れて、佐助を呼ぶべく呼鈴の鈕を押へた。併し佐助のぼつ／＼上つて來るのを待つてゐる時間の餘裕が無いので、直ぐに降りて行つたが、丁度階段の上り口で佐助に出會つたので。

『私は今夜丸佐ホテルで泊ることにしたから、お前は今夜二階に寝るのだ。そして若し電話かゝつたら、構はないからお前が應接して呉れ、警官達はもう歸つたらうねエ?』

『まだ一本は手附かずに残つてゐます』と佐助はつかぬ返事をして。

『お前飲んでゐたんだナ』

『いえ、飲みやしません。お客様に愛想がありませんから、交際に少し計り流し込んだばかりでござえます』

中野は笑聲を残して外に出た。

二十三 聖波羅館の大活劇

中野は馬車が無いので第五街の方を指して徒歩で行つた。彼は此時刻に一人で町を歩いたことが無いので、此新しい経験を寧ろ愉快に感じた。市中は早や極めて静かで空は拭つたやうに晴れてゐる。彼は前夜田舎道を一人で歩いたことを思ひ浮べ、橋の下で女を抱いて渡した時の感觸を味ひ、やがて其女には、永久に會はれないのだ、と思ふと云ひ知れぬ悲しさが胸に迫つて來て、ア、憐れなる女よ、懐かしき女よ、と泣き叫びたくなるのである、彼は此憂へ悲みを紛らすために口笛を吹き始めたが、夫れ

が自然に悲調を帯びて居るのに氣附いて、直ぐに廢めてしまつた夫れから半町計りも進んだ煩に何處からか。

『貴方は中野様じゃあございませんか』と呼ぶものがあるので、彼は驚いて見上げた。只つた今ま彼が遣り過した馬車が、俄に引返して來たやうであつたが、此聲は其御車臺の上にある御者の聲であつた。

『只つた今ま聖波羅館の前でお別れしたのですから、多分人違だらうとは思ひましたが、どふしても中野様に違ひないと思ひましたから、つい失禮を致しました。併し直ぐお引き返しになつても恚う早くは……』と御者は更に尋ねた。

『何だ？、十分とかに分れた？』と中野は鋭く聞いた。

『廣道通のあの角の聖波羅館の前で……』

『夫れは知つてゐるが、併し……』

『あの若い御婦人とお二人で……』

「若い婦人？」

「はい、お宅の前で御一緒にお乗りになりました」

「しまった！」と中野は我知らず叫んで、早くも片足を馬車の踏臺に懸けて「直ぐに其處まで送つて呉れ。全速力で、もう一分の餘祐もないんだ」

「大丈夫、五分間に駆けつけます」と御者は勇ましく云つた。

「賃銀は惜みやしないよ」

「難有うございます」と御者の云つた聲は早や馬車の轆車に依つて能くは聞えなかつた。中野は立つてもゐられないので、座席に腰を卸したが、心は疾くに聖波羅館へ飛んで行つてゐる。

「けしからぬ奴だ。今頃はあの兇漢の爲めに散々惱まされてゐるだらう」と云つて覺えずポケットのピストルを觸つて見た。

馬車は北を指して全速力で走つて行つた。東の方に聖波羅館の塔が、薄すら見え出

したかと思つたら、馬車は急に速力を緩めて、東に方向を轉じ、まだ廻り切らぬ内に馬車が激しく傾いた。そして何か黒いものが踏臺に足をかけたかと思つたら、ドサリと夫れが馬車の中に轉げ込んだ。

「旦那、何うなされました」と御者は上から尋ねたが、中野は餘り驚いたので、其答が容易に出なかつた。

黒いものは瞬時蹲つてゐたが、人間の眞似をしやうと思つたのか、可なり明晰な語調で。

「貴方がお越しでしたら、私も御一緒に参ります。それとも私にお任せ下さいませるか」

「何だ！、探偵か」と中野は驚いて叫び、起き上つて自分の隣りに腰を懸けた探偵の顔を覗き込んで「平田君じゃないか、何うしたんです」

「貴方は中野さんでせう？、あの相川が聖波羅館にゐることを探知しましたから」

中野は此時御者に答へるのを忘れてゐたのに氣が附いて屋根の窓を引かうと思つたが早や御者が開けてゐたので。

「解つたか、平田探偵だ、急いで遣つて呉れ」

馬車は前後左右に揺れて二人の頭が衝突しそうである。そして車輪と馬蹄の響に耳を聳するやうであるが、二人は漸つとのことで二分間計り話しをすることが出来た。平田は突然思ひ出したやうに。

「貴方はピストルをお持ちですか」

「相川のを持つてゐます、二發しか残つてゐないのですけれど……」

「私も持つてゐますから夫れで大丈夫でせう。併し相川は何うして此馬車に乗つたでせう、私は夫が何うも合點が行かないのですが……」

「僕にも能くは解らないですが、矢つ張家に潜んでゐたのでせう。で、僕が御者に表で待つてゐるやうに云つたのですから、相川は夫れを聞いて、貴方がたが階下へお

降りになると、直ぐ表へ出て行つたらしいです」

「畜生！」と云つて懸て小首を傾け「時にあの婦人は此事件に何う關係してゐるのでせう」と聞いたが、中野は飽くまで女の秘密を保護して遣らねばならぬと思つたか

ら。

「多少解つてはゐますが、話が自然長くなりますから、孰れ其内に……」と誤魔化し「君のお蔭でいづれ相川が捕まるだらうと思ひますから、成効の曉は警部長に充分君の功勞を推奨しやうと思つてゐます」

「貴方の助勢で相川を捕へるのですもの、餘り賞めたことでもないですテ」と平田は不平そうに云つた。

馬車は旋風のやうに廣道通に入つた。平田は此邊に巡查はゐないかと、荐りに窓から外を眺めてゐたが、漸く一人見詰かつたので、車上から大聲に叫んだ。馬車を追ふて來いと云ふのである。斯くて二丁計り走つて馬車は聖波羅館の前で止つた。馬はび

つしより汗に濡れて、忙しげに喘いでゐる。此處にも巡査が一人居たので平田は之れ

「僕は本部の平田だが、丁度君は好い處へ來合はした、此家に相川が潜んで居るのだから、一つ加勢をして呉れ給へ」

「承知致しました。相川が捕まりましたら貴方は大手柄ですわねエ」と云つて巡査は敷石で棒をコツ／＼と云はせた。

「フムム」と苦笑して平田は中野に向ひ『では這入りませう』

表の入口の待口所には人が一人もゐない。自働表示盤の示す處に依ると、夜間運轉の昇降機は最上階に昇つてゐるから、夜番も夫れに乗つて上つてゐるのであらう。平田は呼鈴の鈕を二三度押へて巡査に向ひ、拇指で中野を指し。

「此お方と僕は昇降機で最上階に登り、若し其處にゐなかつたら、漸次に下へ搜索して降りる積りだ。夫れが君、順序だらうじやないか。で、君は此處にゐて若し上から

降りて來たものがあつたら、容赦はないから一々誰何して此處へ留め置いて呉れ給へ他には出口はないだらうねエ？」

「此角を曲つた處に地下室の入口がありますが、多分夜間は閉めてあるだらうと思ひます」

「よし／＼、誰か來たら其處を擔任させやう。兎に角用心に及くはなしだからねエ」と云つて眉を顰め「昇降機は全体何うしたんだらう」

平田は苛つて呼鈴の鈕を幾度も／＼押へたが、表示盤は少しも變化を示さない。彼は顔を眞赤にして怒り、何か呟きながら、手帳を取り出して、此怠慢は夜番の姓名を記入し、尙ほ其次へ二三行書き加へた。其處へ曩に車上から呼んだ巡査がやつて來たので、平田は喜んで之を迎へ、地下室の出口を擔當させた。巡査は少し此役割に不慣なやうであつたが、上職者の命令であるから、拒む譯にもゆかないので、直ぐに擔任場處へ出て行つた。先刻から荐りに鈕を押へたり、戸を叩いたりしてゐた今一人の巡

査は、到頭根氣が盡きたと見えて、此無益な勞力を抛棄して表に出で、道路に寄り集つてゐる群集を追ひ拂つたが、叱つてもく寄つて來る。彼は終に痲癩玉を破裂させる。群集はドツと聲擧げる。終に彼は腕白面をした一人の丁稚の腕を捉へて引き立てやうとしたので群集は漸く退散した。既に夜更けてゐるので、普通の人間は二三人しかゐない。多くは賤民や破落漢や酔漢であつたが、巡查が追ひ拂はなかつてから見る間に館前に人の黒山を築いたかも知れぬ、中野は暫く此騒に心を奪はれてゐたが、不圖思ひ出したやうに、暮りと御者を捜した。つい自分の背後にゐるに氣が付いて、彼は苦笑しながら御者の袖を捉へて。

「馬車はあるだらうねエ」

「はい、直ぐ外に置いてございます」

「ある群集を避けて、此角を曲つた處で待つてゐて貰はう、で、若し若い婦人が行つたら、其指圖した處へ送つて呉れ。賃錢は明日の朝宅の方で渡しても好いだらう」

「難有うございます」と御者は頭を下げて出て行つた。

中野は御者が出て行くと、直ぐ振り返つて見たが、昇降機のシャフトには何の變化も起つてゐない、只だ平田の痲癩と當惑が恐ろしく増してゐる計りであつた。

「階段を登つて行つたら何うでせう」

「そんな馬鹿なことは出来ません、彼奴は昇降機で上つてゐるのですから、若し私等が階段から上つたら直ぐ昇降機で降りて來ます。此處はあの男に計り任す譯にゆきませんからねエ」

「他の昇降機は駄目でせうか」

「駄目じやありませんまいが、運轉手がゐなければ矢つ張駄目でせう」

中野は破損してゐるのなれば兎も角、此簡單な機械が解らない筈は無いと思つたので、先づ籠の戸を開け試みたが何うしても開かない。漸くにして右から三番目の籠の戸を開くことが出來たので、彼は直ちに籠に飛び込んだ。そして操縦用のハンドルを

索つて見たが、直ぐ手に觸つたので、彼は注意して之を少しく一方に動かした、と、思つたら籠は忽然一間計り飛び上つた。今度は更に綿密なる注意に以て反對に之を動かしたが、籠は徐々として地に降下した。

平田は飛び上つて喜び。直ぐに籠に飛び移つたので、中野は臨時運轉手として、機械の操縦を擔任することにした。彼は責任の重きを感じて、初めは徐々に運轉させたが、直ぐに手心が解つたので、次第に速力を早め、籠は矢のやうに黒闇を昇つて行つた。平田に暗くて何にも見えないので、電燈のスヰッチを索つて一寸捻つて見た、電氣燈は直ぐに明つたが、直ぐに又た之を消した。寧ろ黒闇の方が敵に知れないで、安全であると思つたからである。大方半ばまで昇つた時に、平田は何を思つたか、突然運轉を中止せよと叫んだ。中野は『向ふを』と平田が続けて叫んだので、注意して見ると、三つほど向ふのシャフトに一點の火が見え、夫れが大なる速度を以て落下してゐる。最上階から降りて来る籠で其中には相川があるに違いない。

籠と籠との距離が大分接近して來たので、平田は一聲高く『止まれ』と叫んだが、向ふの籠は見る間にすれ違つた。と、思つたら轟然たる響と共に、一閃の火光が闇を貫いた。相川の發した此彈丸は確かに手應があつた。ドサツト人の倒れる音に續いてうめき聲が聞えた。向ふの籠は此時忽然止つたので運轉手を射倒したのではないかと思つたが籠は再び降下し始めたので、此方の籠も其後を追ふて全速力で降下した。

相川の籠は早や地に着いたらしい。人の騒ぎ聲と共に、ピストルが確かに五發續けさまに聞えた。そして五發目の反響がまだ終らぬ内に下の籠の火は再び登り出した。相川は警察の手が下にも廻つてゐると知つて引き返したのである。二つの籠は再びすれ違つた。中には確かに二人の影が見えるが、平田は既に一人銃殺してゐるので、今度はピストルを發射する勇氣が無いと見えて、只だ『止まれ』と叫んだが、其聲で規を定めて向ふから一發放つた。其彈丸がヒューと中野の直ぐ頭の上を掠めて、シャフトの鐵材をカチンと打つた時には、追が大膽な彼も覺えず身を縮めた。平田は怒つて

續けさまに二發放つたが、二つとも徒丸であつた。

敵の籠が何階に止まるか、夫れを突き止める必要があるので、中野の籠は少し間隔を置いて後を追ふた。やがて敵の籠はガタンと強い響をさせて廿階邊で止つたらしいので、平田は十九階で止まれと中野に命令した。彼は今度こそは確かに賊を捕へることが出来る、と小踊して喜んでゐる。彼等が十九階で止つて廊下へ飛び出た時に、二十階で確かに足音や扉を閉める音がしたので、二人は直ぐに二十階に登つて隈なく搜索したが、賊は早やくも何處へか姿を晦ましてゐた。併し下へ降りる氣遣は無いから急ひで廿一階に登つて、二手に分れて搜索しやうと思つてゐると、第三の籠が昇つて來て廿一階で止まり、四名の警官がどや／＼と出て來た。彼等は應援に來たのであるから、平田は一應今までの經過を説明し、更に搜索の手配をする必要があるので、中野を一人残して彼等に加はり、五人で荐りに評議を凝らしてゐる。

中野は相川を捕へるのが目的でない、女を彼の毒手から救ひ出さうと思つて來たの

である。然るに其女は或は既に殺されてゐるかも知れぬ、若し生存してゐるとすれば容易ならぬ苦難を嘗めてゐるに違ひない、と思ふと氣が氣でないで、彼は單身廿一階を搜索し、終に廿二階に登つたが此處にも賊はゐなかつた。此上二層の階段を登れば屋根である。中野は獲物を追ふ獵師の熱中をもつて飽くまで追跡する積りで、第一の階段に一足かけたが、此時轟然ピストルの音がしたので、彼は覺えず床の上に身を伏せた、下から登つて來る警官の一行は口々に中野の無謀を警めたが、彼は之を耳にも止めず、起き上つて終に第一の階段を登り盡した。此時再び轟然たる響がしたので彼は冷りとしたが、今度のは慥かに扉を閉めた音であつた。第二の階段を登りきつた時先づ彼の目に映じたのは、つい目の前の摺り硝子の戸に金字で書いた。

辯護士小幡謙造事務所

と云ふ文字であつた。彼は自分の親友にして法律顧問たる小幡を屢々此處に訪問し、此扉を潜つたのであるが、相川が其同じ扉の裡を潜伏所にしてゐらうとは夢にも思は

なかつた。兎に角彼が生命を賭して追跡してゐる相川が此處に隠れてゐることは確かであるから、中野は表の階段を昇つて扉を開けやうとしたが、堅く締つてゐるので、中の様子に一寸耳を澄ました。どふやら女の呷き聲がするやうなので、彼は狂人の如く其身を扉に投げつけたが、直ぐに跳ね返されて大方階段から轉げ落る處であつた。僅か硝子一重を距てゐる計りなのに、女を救ひ出すことが出来ないのは残念である。と彼は地輔踏んで口惜しがつたが、不圖ピストルを持ちてゐることに氣付いて、直ぐポケットから夫れを取り出した。そして其臺尻でしたゝか硝子を打つたが、僅かに龜裂を生じたばかりであつた。更に第二の打撃を加へやうとする處へ、平田が上つて來て加勢したので、硝子は數個の破片となつて内側に轉げ落ちた。

斯くて二人の目の垣は撤せられ。其處に物凄い活畫が映じ出された。表の間と中間の境に突つ立てゐる相川の顔の筋肉は極度に緊張して朱を注ぎ、爛々たる兩眼には輕侮と決心の色が現はれ、鼠を狙つてゐる猫のやうに、今にも飛び蒐らんとする氣勢

を示してゐる。相川がピストルを持つてゐる手を上げたかと思つたら、中野の頬の傍で平田のピストルが鳴り、全時に相川のピストルの筒先から、火焰を發した。

相川は大きな棍棒でいも打たれたやうに後ろによろめいた。其熱した顔は見る間に蒼ざめ、舉げた手は肩から垂れ、ピストルも其手を離れてガタリと床の上へ落ちた。相川が其負傷せぬ方の手でピストルを拾ひ上げやうとして、腰を屈めた時に平田は、『降参せよ』と叫んで更に一發放つたが、丸は相川の肩を掠めて窓から飛び去つた。やがて應援隊が來たので、協力して忽ち戸をこじ開け、中に踏み込み、平田はいきなり相川の喉に飛びつかうとしたが、既に遅かつた。相川は平田が敷居を跨げた瞬間に自らピストルで頭腦を射貫、き立派に自殺を遂げた。平田は地輔踏んで口惜がつた。

二十四 大團圓

中野は女が氣に懸るので、急いで奥の間に這入つた。懐しい鼠の女は机を楯にして

部屋の隅に身を横へてゐた、其眼は閉ぢ、其頬には既に死の色が漂ふてゐた。白い膨くりにした前腕を枕にしてゐたが、其態度がいかにも自然であつた。頭の鬘は解けて房々した銅色の髪が肩から床の上に流れてゐる。次の間の警官等は兇賊の最後の模様や其死体の處分に就いて頻りに語り合つて、此憐れな犠牲を見向きもせない。併し中野が死別を惜むには却つて都合が好かつた。彼は女の顔を飽かず眺めて、限りなき哀愁と寂寞にポロ／＼と熱涙を零し、手巾で窃つと目を拭ふて、臆て恐る／＼女の手を取つたが、不思議にまだ温い。中野はそれを他の手に持ち直はしてじつと眺めてゐたが終に頭を屈めて一寸唇を之に當てた。やがて女の手が徐々に堅く中野の手を握り締めた時の中野の驚と喜は逆も拙ない筆で述べることは出来ないから、此處は寧ろ讀者の想像に任せた方が安全である。

かくて女は中野の親切な介抱で、漸く椅子に腰を懸けられるやうになつたが、平田が先程から此室に詰め切つて少しも離れないのには二人共當惑した。平田は馬車の中

でも中野に一寸尋ねたが、彼は此女に大分嫌疑をかけてゐるので、假令女の罪跡が擧らぬにしても、證人として呼び出されることは確かである。中野は何うして女の名譽を保護してやらうかと、様々に心を碎いたが、兎も角平田と他の警官を巧く賣取する外に策は無い、と思つたので、平田を隅の方に呼んで、莫大な金を提供し、女を此事件の無關係者として取り計つて呉れるやうに、と懇請した。平田は女の名前だけでも明かさねば、其計ひが出来ないと強情に言ひ張つたが、つまり此女を表面上中野夫人と云ふことにし此女に關する一切の責任を中野が引き受けると云ふことにして話は纏つた。

女は次第に氣力が恢復したので、平田等の計ひで此建物の裏に出口を有する、貨物の昇降機から女を窃つと逃がした。女は馬車で中野を待つてゐる約束であるから、中野は直ぐ普通の昇降機で降りやうとしたが、其處へ一名の巡查がやつて來て。

『小幡と云ふ男が貴方に懺悔せねば目が冥れないと、云つて先刻から頻りに哀願しま

すから、御面倒でも行つてやつて下さい』

『小幡？』

『はい、小幡謙造と云つて貴方の法律顧問じゃそうです』

『其小幡が何うして懺悔すると云ふのでせう』

『貴方はまだ御存じないのですか、曩に平田探偵の銃丸に肺を射貫かれて、今も頻死になつてゐるのです、大方相川の同類でせう』

中野は非常に驚いた、併し小幡が相川の共謀者であるとは、何うしても思はれないが、今まそれを争つてゐる隙はない。親友が頻死の状態であると聞いては、じつとしてゐられないので直ぐに第廿二階まで降りて、小幡の枕許に立つた。小幡が幽かに目を開き、苦しい息遣をしてきれ／＼に話した處によると、全く相川渡米以來共謀してゐたので、晚餐の席で中野に寶玉の事を話した時に、其所在を突き止めて、相川に知らせたのである。中野には恩義があるから、相川に云ふは云つたが、可成中野が早く

寶玉を始末すれば好いかと、心でも非常に焦つてゐた、だから相川が彼の夜青野村へ行くと云つたのを止めた位であつた。小幡は兇賊の連累者であると云ふ觀念よりも、兇賊の顧問であると云ふ觀念の方が強かつた。丁度中野の法律顧問であるやうに、相川の顧問として寶玉の所在を知らせて遣つて、之に對する報酬を貰ふのは決して恥づべき行爲でないと思つてゐるのであつた。

X X X X X X X X

馬車が非常に動揺してゐるから、稍もすれば中野の方に倒れ掛りそうなので、女は窓框に手を懸けて辛く上体を支えてゐる。初心な中野は女と並んで座してゐるのが何となく羞かしいからであらう、どふしても女の話しかける言葉が思ひ出せない。女は此沈黙を少し誤解してゐるやうである。戀人同士の間には能く恁んな事があるものだが、女の中野に對する気分は、夫れが爲めに少し冷かになつたやうだ、が、それと全じ割合に彼女の心は痛みを感じるのである。

「貴方が巧く計つて下さつたから、お蔭で私は證人に引き出されずに済みます。此御親切は私生涯忘れません。貴方、其お積りであんなに計つて下さつたのでせう？」と女は尙ほ中野の眞意に對して些少の疑を挾んでゐる。

「何も貴女を此事件に引き入れる必要は無いとやありませんか。それが當然なのです。貴女には少しも何が無いですからねエ」と中野は少し落付が出来たと見えて、始めて之れだけの長文句が言へた。

「何とは何？、罪？」と女は大膽に少し慣々しく云つた。

「そうです、貴女に罪は無いと云ふのです」

「大有りですわ、私し盗……人です」と少し躊躇したが併し明瞭に云ひ放つた。

「けれど盗人じゃないです」と中野は言調を強めて否定し「貴方はまだ私知らないと思つてますねエ」と大分親しみが出来て来た。

「私が？貴方何を知つてゐらつしやるの？」

「私が貴女の爲と云ふよりも、寧ろ私の物數奇にしたことが、大きな恩義のやうに思つて、寶玉を中野から奪つて態々持つて来て返して下さつたことです。貴方がお歸りになると、私は直ぐ發見しました。で、私は貴女がこれ程までに私を思つて下さるのかと、私しは嬉し泣きに泣きました。私は地を分けても貴女を探し求めねばならぬ、そしてお構がなければ、彼の寶玉を身に着けて戴かうと思ひました」

「貴方は私を誤解してゐらつしやるやうです。私を買ひ被つてゐらつしやるのです。私は今夜寶玉を返す爲めに、貴方のお宅へ忍び込んだんじやありません。兎も角夫れ計りが目的ではなかつたのです」

「けれど、貴女は寶玉を持つて来て下さつたのでせう？」

女は點頭いた。

「では、私の云つたのが事實じやありませんか、貴方の身は全く清淨潔白になつたのじやありませんか」

「いえ、夫りや違います。私は他にも目的があつてお宅へ忍び込んだのです。お戻すると全時に盗まうと思つて。ハイ、私……私し盗みました」と女は苦しい覺悟を極めて斷然と云つた。

中野は此言葉の意味を解しかねて暫く黙してゐたが、漸くに口を開き。

「どふも貴女の仰しやることは私には解りません。何を盗んだと仰しやるのです。何處にそれがあるのです」

「それを到頭失くしました」

「貴女の鞆の中にあるのじやありませんか」

「貴方お拾ひなすつたの？」

「ハイ、貴女が鞆室の中にお忘れになつたと見えて、其處に轉がつてゐました。何かあの中に私のものであるのですか」

女はハタと當惑して、暫く首を垂れたまゝ黙つて考へてゐたが、やがて。

「貴方、中を御覽なすつたのじやないでせう？」

「私には其権利がありません」

「他の人でしたら屹度権利があると思つたでせう。事情が事情ですから、夫れを開けて見る権利が貴方にあると私も思ひます、と、兎に角……」と云ひさして女の聲は震へかけたが、漸く之を制して『もうお開けなすつても構ひません。貴方に假令無かつても私が其権利を譲ります。お頼みですから歸つて中を檢めて下さいませ』

「中野は驚いて女の顔を見詰めてゐたが。

「何とお答へして好いか解りません」

「き、屹度解ります。あの中にあるものが總てを語ります。お解りになりましたら、多分……多分同情して下さるだらうと思ひます。若し私を思つて下さつたら私の名刺入れもあの中にありますから……」と云つて女は躊躇つた。喉からこみ上げて來る啜り泣を壓へつけてゐるので、稍もすれば聲が震へかけるのである。女は唇を残酷に嚙

怪
んで暫時伏向ひてゐたが、やがて震え聲で『ど、どふぞ直ぐに歸つて下さい。そ、そして中を拾めて下さい。ねエ貴方、お頼みですから』と只管に哀求した。

『宜しい。では、此處で馬車を止めても構ひませんか』
『どふぞ』

中野は馬車の屋根の窓をステッキで押し開け、御者に注意して馬車を止めさせ。そして直ぐに飛び降りたが、言葉を交はさず此儘別れるのは何だか残念なやうにもあり、何か重大な要件を忘れてゐるやうにも思はれるのである。女は又た中野が黙つて飛び降りたから、自分の云つたことが、慥かに中野の嫌疑と不快を招いたに違ひないと疑つた。で、中野は二三歩行つて直ぐ引き返し、馬車の踏臺に片足かけ、其脛の上に片腕載せて、谷間の百合のやうに、首を垂れてゐる女の憂を帯びた蒼白い顔を黙つて覗き込んだので、女は顔を上げて。
『何かまだお話がありますの？』と聞いた。

『一寸お尋ねしたいのですが、若し貴方に太した不埒がないと私が認めたら……』
云つて中野は呵々と笑ひ、やがて真面目に返り『その時は貴方……』

『解つてゐるじやありませんか』と女は中野の心を牽きつける爲めに、心の奥の奥をチラと見せた。

『貴女は私の訪問のことを云つてゐるのでせう？。明日の午後ではいかゞです。尤も電話で申し上げても構はないでせう』

『番號帳を見て戴けば直ぐに分ります』と云つた時に何うした譯か女の聲は震へを帯びてゐた。

『で、名刺には貴女の住所も這入つてゐるでせう』

『はい、慥かにあります』

『まだ三十分計りは起きてゐらつしやるでせう？、事に依つたら電話で申し上げたいと思ひますから』

『私し寝やうとしたつて寝られせんわ、どふぞ何時なりともではお寢み』

『左様なう。御者君やつて宜しい』

中野は嬉しそうに微笑しながら、馬車がとろ／＼阪を昇りきつて、其黒い影が隠れてしまふまで見送り。やがてステッキを右手に提げて急ぎ足に歸つて行つた。

女は馬車が止るとヒラリと歩道に飛び降る、ポケットから財布を出して、御車に纏頭を與へた。やがて馬車が見えなくなつても、女はまだ門前で躊躇してゐる。家は仲々廣大な構で、前には幅二間計りの長い庭園がある。尤も入口に通ずる敷石で二つに割られてゐるが、低い石柱と鐵鎖の柵を圍らし、配置好く樹木を植えて小石を敷き詰めてある。夜が更けてゐるからであらう、どの窓からも明が洩れないが、只地下の窓が一つ薄すらと明つてゐる。女は漸く決心し、柵を跨げて庭園に入り、其窓に歩み寄つてポン／＼と叩いた。間もなく表の門は開かれ、女の驚いた顔がぬつと現はれた。

『まア、百合子嬢さんでございますかよう歸つて来て下さいました。此二日計りお歸

りが遅いもので、私しは大變心配をしてゐました』

女は静かに笑つて門を潜つた、其處は第一階の廊下になつてゐる。百合子は直ぐ二階へ上らうと思つたが、階段の方へ二三歩行つて、やがて直ぐ引き返して。

『梅や、お父さまは？』

『貴女がお出ましになつてから、別段お變りはないやうでございます、今ま静かに寢んでゐらつしやいます』

『では、少しはお宜しいのだらうねエ』

『そうでございます、貴女がお歸りになりましたからには、一層お元氣がつきませうどふぞ明晩はお出ましになりませぬやうに梅がお願い致します』

『もう遅く歸るやうなことは無いよ。では、お寢み』

百合子は忍び足して階段を上り、二階の父の寢室の前で一寸立ち止まり、中の様子を窺つたが、下女の云つたやうに父は安らかに眠つてゐるので、更に階段を登つて、

三階の自分の室に入つた。彼女は若しや電話の呼鈴が鳴りはせぬかと、気が焦々してゐるので、電燈のスヰッチを手早く捻つて、急いで衣服を改め、再び階段を降りて二階の圖書室に這入り、戸を静かに締めて電燈を明した、中央のテーブルの上には讀書ランプがあつて、其横に机上電話機が置かれてある。彼女は其前の椅子に腰を懸けて電話機を手前に引き寄せ、チリと音がしたら直ぐ受話機が取られるやう身構して、讀書ランプのスヰッチを捻り當なしに電話帳を繰り廣げて見てゐたが、無意識にナノ字の所を探してゐたのに氣がついて覺えず微笑した。彼女がまだ待ち遠いと云ふ感じを起さない内に、早電機機がキチと音をさせたので、急いで受話機を取つた。其時何故か百合子の顔はバツト赤くなつて動悸が激しく打つた。受話機は暫時妙な音を發したが、やがて。

「モシ〜、貴女は九十番ですか」

「ハイ九〇です」

「後藤雷太郎さんのお宅ですね」

「そうです」

百合子の動悸は一層激しく踊り出したので此聲は妙に震えた。

「電話口にゐらつしやるのは後藤のお嬢さんですね」

「はい」

「後藤百合子さんですか」

「はい」

「百合子さん、私は中野丹次郎です」

此處で話は一途絶れた。百合子はその喉の脈が忙しく搏つて、下から何かこみ上げて來るやうに感じた。

「百合さん、靴を開けましたよ」

「どふぞ、仰しやつて下さいませ」

『貴女の憎むべき罪惡と穢はしい秘密をすつかり観破しました』

『ええー！』

中野は向ふの電話口で呵々と笑つてゐる。

『私は尙ほ夫れ以上のことをしました。私は今まで祭壇に焚火を供へてゐました。解りましたか』

『解りません、どふぞ云つて頂戴』

『貴方の幸福を祈るために祭壇の前で焚いたのです、泥川水電會社一件の書類は灰になつてしまいました』

『貴方』

『百合さん、喜んで呉れますか』

『解つてゐるじやありませんか、私し之れ程嬉しいことはありません私がどれ程父の爲めに心配したか、夫れを知つて下さつたらお解りになります。其心配と云つたら。』

……まア貴方一寸聞いて下さいませ。父は日々々々衰えて、大方墓場の傍まで近づいてゐるのです。ですから……』

『それで、貴女はかの書類を手に入れて、お父さまにお與げになる積りでしたのでせう？』

『そうです。私し何も良心に恥る事は無いと思ひました。父には少しも罪が無いのですものオ』

『勿論です、併し貴女は何故其事を私に云つて下さらなかつたのです』

『父がお頼みしたそうですが、貴方は断然お断りになつたのです』

『けれど、百合さん、貴女が後藤さんのお嬢さんだとは夢にも知らなかつたのですからねエ。それでは……』

『一寸、貴方、交換手が聞きますよ』

『交換手は忙しいから他人の話なんか聞く暇がないと云つてゐます。然し百合さん。』

怪 ?
 私わたしは後刻ごこく。正式せいしきに結婚けつこんを申込みまをしこますから、是非ぜひ御承諾ごせうだくください』
 百合子ゆりこは小聲こごゑで。
 『ハイ』と答こたへたが。其その瞬間じゆんかんに混線こんせんして。電話でんわが切きれた。

小怪 ? 終

發行者

大阪市南區大寶寺町西之丁二十二番地

博多久吉

大正二年二月廿七日印刷
 大正二年三月十三日發行

不許複製

發賣所

大阪市南區大寶寺町佐野屋橋筋西へ入
 成象堂
 電話南電壹七七番
 振替阪七三三三番

怪 ?
 定價金六拾錢

印刷者

大阪市南區長堀橋筋二丁目三十七番地

磯野利木松

博多成象堂發行書目

●神田伯龍講演

西鄉隆盛	桐野利秋	篠原國幹	伊東彌太郎	飯篠辰之助	青葉山大仇討	九天保會我	宇都宮仇討	豪傑絹笠因幡	石井郡山娘之仇討	加賀騷動	加賀大槻内藏之助	加賀織田大炊
廿五錢	廿五錢	廿五錢	廿五錢	廿五錢	廿五錢	廿五錢	廿五錢	廿五錢	廿五錢	二十錢	二十錢	二十錢
四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢
武術傳	武術傳	武術傳	武術傳	武術傳	武術傳	武術傳	武術傳	武術傳	武術傳	武術傳	武術傳	武術傳
飯篠山城守	上泉伊勢守	丸目藏人	上泉四天王	塚原小天狗	伊東一刀齋	小野次郎右衛門	宮本武勇傳	宮本武藏旅日記	宮本譽之太刀風	浮田傳五右衛門	小藤田彌兵衛	熊見多原仇討
二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢
四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢
戰記	戰記	戰記	戰記	戰記	戰記	戰記	戰記	戰記	戰記	戰記	戰記	戰記
片桐且元	波戰記	波戰記	波戰記	波戰記	波戰記	波戰記	波戰記	波戰記	波戰記	波戰記	波戰記	波戰記
二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢
四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢	四錢

●神田伯龍講演	慶安太平記	由井正雪	丸橋忠彌	曉星五郎	鳴星阿波騷動	あざみ小僧	あざみかけ松	●水見六郎次	●國定忠次	●石川一口講演	大澤主水	烈婦女馬士	●口下部五郎
正價郵稅	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	水廿五錢四錢	廿五錢四錢	廿五錢四錢
●高松善兵衛	淺田岡平	久松桃太郎	久松桃太郎	久松桃太郎	富山長谷部國太郎	柳生但馬守	柳生飛彈守	名槍笹野權三	長門守木村重成	義賊鼠小僧	腕之喜三郎	小狐靈	旭堂南陵講演
廿五錢四錢	廿五錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢
●真田三代記	信州合戰	三國峠大合戰	長篠合戰	目山	三代記	加太彌太郎	加太義勇傳	三代記	千早合戰	鎌倉合戰	新田義貞	正成	正行
二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢

●玉田玉秀齋講演	●大穴戸源八郎	●無双後の穴戸源八郎	●無双最後の穴戸源八郎	●細川家澤村才八郎	●細川家後澤村才八郎	●關口八郎	●水戸漫遊記	●和久半左衛門	●松林伯龍講演	●結城小四郎	●氏原魯山講演	●水戸北國漫遊記
正價郵稅	廿五錢四錢	廿五錢四錢	廿五錢四錢	廿五錢四錢	廿五錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	三十錢四錢	三十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢
●吾妻竹造講演	●南部龍之助	●要石百太郎	●片倉小十郎	●伊達政宗	●山崎琴書講演	●神免重助	●四王天甚五兵衛	●眞劍御前試合	●血染の片腕	●見雷也	●新藏	●明治鼠小僧
正價郵稅	廿五錢四錢	廿五錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	廿五錢四錢	廿五錢四錢	廿五錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢
●松月堂榎林講演	●海田屋騷動	●大川友右衛門	●石井常右衛門	●三省社一瓢講演	●關口彌太郎	●三ッ坊小僧	●西尾一山講演	●豪傑塚原主水	●春陽亭夢山講演	●朝比奈彌太郎	●船越烟波講演	●おぼれおん
正價郵稅	廿五錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	二十錢四錢	廿五錢四錢

●松月堂魯山講演 正價郵稅 那珂一石齋 二十錢四錢	●渡邊霞亭著 正價郵稅 惡美 二十錢四錢	●廣津柳浪著 正價郵稅 波男波 廿五錢四錢
●多田省軒著 那珂園武 二十錢四錢	●堀内新泉著 波女 廿五錢四錢	●伊藤銀月著 樂師 廿五錢四錢
●加藤紫芳著 淺山十勇士漫遊記 二十錢四錢	●伊藤銀月著 仙女 廿五錢四錢	●巖谷小波著 見茶屋 廿五錢四錢
●神崎伯翁講演 探偵貴婦 二十錢四錢	●三省社伯馬講演 花見 廿五錢四錢	●古川斗鬼著 萩鷹 二十錢四錢
●尾崎紅葉著 小葉末の露 廿五錢四錢	●西尾東林講演 天明八人白浪 二十錢四錢	●三遊亭花遊講演 俠客牛若長次 二十錢四錢
●淺川富士丸講演 長井主水輝政 二十錢四錢	●天明八人白浪 二十錢四錢	
●飯沼勝五郎 二十錢四錢	●女廿五錢四錢	
●伊東馬谷講演 荒木又右衛門 二十錢四錢	●星野勘左衛門 二十錢四錢	
●放牛舍桃湖講演 佐野義勇傳 二十錢四錢	●天明八人白浪 二十錢四錢	
●三遊亭花遊講演 俠客牛若長次 二十錢四錢	●毒婦おすみ 二十錢四錢	

武士道文庫

日本海軍探偵沖禎介 乃木大古 血染之聯隊 白虎隊 肥後駒下 赤穂四十七 笹野權 中山大納 關口彌太 田宮坊太 丸目藏 八田大 眞田大	袖珍形總 定價各 廿五錢 郵稅 及金 天ス 及金 字八 類人 美本 錢四 册一 稅
--	---

今昔叢書

羽衣齋譯 梨花生著 水魂郎著 同 難波磯鴨著	歐米 新式手品 文之 正青年訓 言集 立志少年偉人	神田伯龍著 森山吐川著 同 植梗郎著 前田柳美編	忠孝 義烈 日本 お伽 日本 お伽 日本 お伽 日本 お伽	花 花 花 花 花 花 花 花	定價 郵稅 二十錢 二十錢 二十錢 二十錢 三十錢 三十錢 三十錢 三十錢	總布 金包 箔入 順入 美本 錢四 册一 稅
------------------------------------	--	--------------------------------------	--	--------------------------------------	--	---

嶋田吐川著	新體美文書翰	七十錢	定價	法學研究會編新	刑法註釋	十五錢	四錢
同	新體美文記事文	七十錢	八錢	藤田光一編	素人醫者	三十錢	四錢
同	新體詩	料十五錢	四錢	龍野元四郎	ゴード、ダスト	十錢	二錢
同	新書翰	文二十錢	四錢	小川未之助	西洋即席うらふ	十五錢	二錢
川上泊堂著	普通國民新用文	二十錢	六錢	福澤諭吉	當世秘密うらふ	十五錢	二錢
同	普通日用女用文	二十錢	六錢	浪花節腕くらへ	十五錢	四錢	
同	日用新用文	十二錢	四錢	柳生十兵衛	旅日記廿五錢	四錢	
同	日用女之	十二錢	四錢	元祿快舉	四十七十五錢	八錢	
片山海南著	大日本最新用文	三十錢	八錢	落語	集二十錢	四錢	
同	新案大日本用文	三十錢	六錢	地歌さらへ考	大全廿五錢	六錢	
同	新日本用文	廿五錢	六錢	世話	淨璃理傑作集	三十錢	八錢
同	普通はがき用文	十三錢	四錢	同	淨璃理大	全二十錢	六錢
同	新はがき用文	十二錢	四錢	同	淨璃理集	十五錢	四錢
伊藤清著	往復はがき用文	十二錢	四錢	同	喜劇	二十錢	六錢
同	大日本最新作文	三十錢	八錢	同	語大	全二十錢	六錢

後藤光憲編	新撰いろは字典	六十錢	八錢	野中多摩子著	每日之御料理	三十錢	六錢
同	明治節用字典	三十錢	八錢	大箱金瓶生	花早指南	二十錢	六錢
片山海南編	畫引實用新字林	三十錢	六錢	愛國散七種	年吟詩集	十五錢	四錢
同	新書翰	支		加波先生著	美文韻文之資料	廿五錢	六錢
同	新記事文	支		同	美文良材合本	四十錢	六錢
同	新論文	支		同	美文良材	十五錢	四錢
同	女子書翰文	支		同	美文良材	十五錢	四錢
同	空中飛行機	八錢	二錢	同	美文新書翰文		
同	間宮林蔵	八錢	二錢	同	美文新記事文		
同	白虎隊	八錢	二錢	同	美文新論文		
同	木村長門守	八錢	二錢	同	尺八獨習指南	十五錢	二錢
同	吉田松陰	八錢	二錢	同	尺八早指	十五錢	二錢
同	徳川家光	八錢	二錢	同	尺八線獨案	十五錢	二錢
同	春日局	八錢	二錢	同	尺八味線獨案	十五錢	二錢
同	日本武尊	八錢	二錢	同	尺八風琴獨稽	十五錢	二錢

野中耕田編 遊藝美 自撰	寢兒浦こてふ 新藝 歌	惚天野史編 新藝 歌	こてふ戯編 新伊 歌	東五郎平編 新二〇 集	山谷鶯鳴編 新落語 集	藤江光一編 新改良 舞	同 改良新 舞	同 最 舞	寢兒浦こてふ さ 集	意氣那人編 都々逸 全	寢兒浦こてふ 繪入百人 首	阿呆亭主人編 滑稽落 語	竹の本主人編 新作 大	惚天野史編 當世 歌
人二十錢 六錢 原田重一著 當世は	人十五錢 四錢 ひらこぎ戯編	人十五錢 四錢 同	人十五錢 二錢 同	集十五錢 四錢 同	集十五錢 四錢 同	舞十錢 二錢 同	舞十錢 二錢 同	舞十五錢 二錢 春雪居士編	集十二錢 四錢 三の糸編	全十錢 二錢 基春書	首十錢 二錢 同	語十錢 二錢 同	大十錢 二錢 同	歌十錢 二錢 同
がき用文 十錢 定	はやり歌 十錢 二錢	はう歌 十錢 二錢	二〇か 十錢 二錢	江戶歌 十錢 二錢	大津繪節 十錢 二錢	席落は 十錢 二錢	短篇落は 十錢 二錢	新作おぞ 十錢 二錢	やんれ 十錢 二錢	新案畫さ 十錢 二錢	新案畫さ 十錢 二錢	浮 十錢 二錢	節 十錢 二錢	節 十錢 二錢
加太彌太郎 水戸巡遊記	關口彌太郎 關根彌次郎	關原下傳 笹野權三	後藤又兵衛	荒木又右衛門	各壹冊 各冊	各壹冊 各冊	各壹冊 各冊	各壹冊 各冊	各壹冊 各冊	各壹冊 各冊	各壹冊 各冊	各壹冊 各冊	各壹冊 各冊	各壹冊 各冊

290
60



終

